

0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15

始



若林勝邦述

明治三十一年
正月
印

涉史餘錄

早稻田大學出版部發行

目 次

歴史遺物ノ史學ニ與フル裨益	一頁
南米ペルウノ結繩ト琉球ノ結繩	九
印度瓜哇風俗抄	一四
南米ペルウノ結繩ト琉球ノ結繩補遺	二四
日本ニ現存セル銅鼓ノ歴史及ビ其種類	二九
筑後國造磐井ノ遺跡	三五
校倉及ヒ正倉院	四〇
我國史上ニ見タル玉ニ關スル話	四七
大和國八瀧村文忌寸禰麻呂ノ銅牌圖解	五三
筑前國志賀島ノ金印	五五
歴史遺物ノ誤解ト發見ノ苦心	六一

予が見タル古文書中ノ一二

二

六九

○歴史遺物ノ史學ニ與フル裨益

若林勝邦

此講義錄ノ正科目ニ毎號坪井文學博士ガ史學研究法ヲ説カレ浮田和民君ガ西洋上古史ヲ述ベラレタレバ學理ニツキテ研究法ニツキテハ學習スルニ遺憾ナシト云フベシ然レハ此等ノ諸先輩ガ講義ヲ學習スルノ傍ラ補助學科トシテ世ノ潮流ニ隨伴シテ各學科ノ進歩ニ後レザランコト期シ學理ヲ應用シ研究法ヲ練習スルノ智識ヲ養ハザルベカラズ此意義ニヨリテ雜錄ノ一項ヲ加フコトハナレリ、故ニ本文ハ實例ト對照シテ歴史遺物ノ史學ニ與フル裨益ヲ述アベシ。

歴史遺物トハ其名稱弘シコヽニ範圍ヲ限リオカザルベカラズ今其時代ニツキテイハヤ本文ニハ奈良朝ノ時代ヨリ以上ニ溯レル遺物ニツキテ説カソコト期ス、而シテ遺物ニモ各種類アリ彫刻セラレシ文字ノ存スル金石、腐蝕セシ文書、織物ノ断片、陶器等今日ヨリ豫想外ニ其數頗多アリ此等ノ遺物中ヨリ史學者ノ從來疑ヲ存

シタル事項又ハ全ク端緒ヲモ得ザル事項ヲ啓發セシモノアリコヽニ一例ヲ舉ケ
ンカ天保二年九月廿九日大和國宇陀郡八瀧村字笠松ト云ヘル畑地ヲ耕作ノ際發
見シタル銅板入りノ銅函アリ共ニ金銅壺及ビ玻璃壺ヲ見出シタルガ今日東京上
野公園帝室博物館ニ陳列シアリ其銅函ノ中ニ納メタル銅板ニハ左ノ銘文アリ
壬申年將軍左衛士府督正四位上文禰麻
呂忌寸慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒
銅板ノ長サハ八寸六分幅一寸四分厚九厘アリ此板ハ後世ノ牌ナリ此銘文ニアル
壬申ノ年ハ弘文天皇ノ元年ニシテ天武天皇ノ兵ヲ舉ヶ繪ムシ時ナリ禰磨ト云ヘ
ル人ハ當時大海人皇子ニ附キ隨ヒシ舍人ノ一人ニテ文首根麻呂ノ名吉野宮舍人
ノ中ニ見エタリ而ノ將軍ト云ヘルハ根麻呂ガ此亂ニ東軍ノ一將トナリテ戰功ア
リシガ故ナリ天武紀ニ村國連男依書首根麻呂等ヲ遣ハシ不破ヨリ出デ直ニ近江
ニ入ラシムトアリ根麻呂此ノ功ニヨリ功封一百戸ヲ賜ハリキ續紀大寶元年七月
壬辰ノ條ニ

勅曰先朝論功行封時賜書首尼麻呂一百戸云云賞雖各異而同居中第宜依令四分

之一傳子

トアリ禰麻呂が卒セシ月日ハ此銅牌ニ記スル所ト續紀ニ記スル所トハ異ニセリ
蓋シ銅牌ニハ其死セシ當日ヲ記シ續紀ハ其死ヲ公ニ届出タル日ヲ記シタルナラ
ン公私ノ間ニ其ノ卒セシ月日ヲ異ニスペキ事情ノ存セシナルベシ續紀ニ記セル
此人ノ卒セシ月日ハ左ノ如シ

慶雲四年十月戊子從四位下文忌寸禰麻呂卒遣使宣詔贈正四位上并賛絶布以壬
申功也

トアリ又此人ノ贈位ヲ直ニ從來ノ位ノ如ク記セリ左衛士府督トナリシコト續紀
ニ見エズ禰麻呂ハ河内ノ文氏ニシテ元來文筆ヲ司ル家柄ナリシカド壬申ノ亂ニ
遭遇シテ戰功ヲ立テ壬申年功臣トシテ官位漸ク進ミ功封功田ヲ賜ハリ朝廷ノ眷
顧厚ク子孫マデモ其ノ餘澤ヲ蒙リキ續紀ニ靈龜二年四月癸丑壬申年功臣ノ子ニ
田ヲ賜フ中ニ禰麻呂が息正七位下馬養見ユ又天平寶字元年十二月ノ條ニモ禰麻
呂が壬申年功田八町中功ニシテ二世ニ傳フベシトアリ前ニ記シタル書氏ハ文氏
トモ書キ初メ首姓ナリシガ後忌寸姓ヲ賜ハリタルナリ紀及ビ續紀ニハ禰麻呂又

ハ根麻呂、尼麻呂ナドアリ、又彌麻呂ナドアレド禰ノ誤字ナルヲ論ナシ此銅函ト共ニ發見サレシ金銅壺中ニ玻璃壺ヲ納メタリ、此玻璃壺中ニ納骨セリ、此納骨ノ壺ガ我邦工藝ノ發達史上ニ裨益ヲ與フルヤ少カラズ、壺ノ高サ五寸五分、周圍壹尺六寸蓋ヲ存ス、重サ三百五十匁アリ又金銅壺ノ高サ九寸、徑七寸五分、周圍二尺四寸四分アリ、蓋ヲ存スコレ亦時代ニ於テ明カナル鎧金製ノ壺ナレバ製作ニ於テ我邦美術史上ニ資料トシテ貴重スベキモノナリ（詳細ハ考古學會雜誌ヲ見ヨ）

右ノ如ク確實ナル歴史遺物ノ一度發見セラル、ヤ其考證ヲ史學上ノ智識ニ據リ又其他考古學科等ノ力ニヨリテ了解セラル、ニ至レバ歴史上全ク遺漏セルヲ補ヒ、或ハ半バ足ラザル事項ヲ満足セシメ得ルニ至ル、然ルニ右ノ例トハ異ニシテ全ク性質ヲ了解セザルガ爲メ鬼神談ニ等シキ事項ニ附セラレタル從來ノ疑問ヲ新ナル事項ノ發見ニ伴ヒテ今日昔日ノ愚ヲ笑フニ至ルモノアリ、其一例ヲ示サン續日本後紀仁明天皇承和六年冬十月ノ條ニ曰ク

出羽國言、去八月廿九日、管田川郡司解僕、此郡西濱達府之程五十餘里、本自無石、而從月三日霖雨無止、雷電鬪聲、經十餘日、乃見晴天時向海畔、自然隕石、其數不少、或似

鎧或似鋒、或白或黑、或青赤、凡厥狀軀、銳皆向西、莖則向東、詢于故老、所未會見、國司商量、此濱沙地而徑寸之石、自古無有、仍上言者、其所進上、兵象之石數十枚、收之外記局、勅曰、陸奥出羽并太宰府等、若有機變、隨宜行之、且以上言、充制權變、令禦不虞、又轉禍爲福、佛神是先、宜修法奉幣

三代實錄、陽成天皇元慶八年九月ノ條ニ曰ク

出羽國司言、今年六月二十六日、秋田城雷雨晦冥、雨石鎧二十三枚、七月二日、飽海郡海濱、雨石似鎧、其鋒皆向南、陰陽寮占云、彼國之憂、應在兵賊疾疫

同書光孝天皇仁和二年夏四月ノ條ニ曰ク

令出羽國慎警固、去二月、出羽國飽海郡諸神社邊雨石鎧、陰陽寮占云、宜警兵賊、由是預戒不虞

承和六年ハ今年ヨリ一千六十三年前ニシテ元慶八年ハ一千九年前、仁和二年ハ一千十七年前ナリ、此兵象之石又ハ石鎧ト云ヘルハ單ニ形狀ニヨリテヘミ名稱ヲ附セルニテ今日ノ史學ヲ修ムルモノガ考古學、人類學ノ智識ニヨリ石鎧ト呼ビ利器ナリト云ヘルト異ナリ其所用如何ハ了解セザリシヨリ雷電聲ヲ鬪ハス十餘日

ヲ經テ晴天ヲ見ル時ニ海畔ニ向テ自然石ヲ隕スト云ヒ雷雨晦冥石鎧ヲ雨ラスト
云ヒ其石鎧ノ地上ニ存スル理由ヲ説ケルハ面白シ、今日ニテハ我邦石鎧ノ發見地
ハ全國殆ソド至ラザルナク北ハ北海道ヨリ西南ハ九州、四國ヨリ本土ヲ通シテ採
集セラレ石器時代人民ノ分布ヲ知ルノ材料トナレリ故ニ銳ノ向フ所東西南北各
異ナリ、而メ似鋒トハ石槍ノ類ナリ、石器ヲ以テ電ニ闘スル説ヲナシ又ハ神体ト崇
ムルノ例ハ獨リ、我邦ノ古代ニミ存スルニアラズ、じより一氏ノ「まんびをあめ
たるト題スル書中ニ云フ、ギリシヤ及ヒローマノ神ノ冠ヲ飾ルニ往々石鎧ヲ以テ
セリ、じゆびたあト云ヘル神ハ其神体石ナリ而メギリシヤノ政事堂ニテハ此神ヲ
備ヘ置キ手ニ一個ノ燧石ヲ持タシム此燧石ハ電ノ印ナリ云々然レバ石鎧ニ關シ
タル記事日本ノ如ク歴史上ノ書類ニ見エタルハ外國ノ書籍中ニ散見スルコナシ、
我邦ノ石鎧ガ世界ノ蠻民中ニ行ハル、石鎧又ハ今日文化隆盛ノ國々ヨリ發見サ
ル、石鎧ト同一ナルコトハ人類學考古學ノ力ニヨリテ明カニ解シ得ラレタルナ
リ、其解釋ヲ與ヘラレタルト同時ニ史學上性質ノ不明ナリシ爲メ疑問ニ附セラレ
タル事項ヲモ啓發シ得ルニ至レリ、次ニ舉クベキ一例ハ埴輪樹物ノ種類ナリ、日本

書紀垂仁天皇ノ御宇三十二年ニ曰ク

秋七月甲戌朔己卯皇后日葉酸媛命薨、臨葬有日焉、天皇詔群卿曰從死之道前知不
可今此行之葬奈之爲何、於是野見宿禰進曰夫君王陵墓埋立生人是不貞也、豈得傳
後葉乎、願今將議便事而奏之、則使者喚上出雲國之土部壹佰人、自領土部等取埴以
造作人馬及種々物形、献于天皇曰自今以後以是土物更易生人樹於陵墓爲後葉之
法則

ト此文中人馬及種々物形ヲ造ルトハ如何ナルモノナルカ其人形ノ種類、馬ノ種類
ヲ始トシ當時殉死ノ動物ノ種類其他ノ物形ヲ模造セシヤ必然ニシテ後世ヨリ見
レバ當時ノ風俗其他ヲ知ルニ最良ノ材料ナリ即チ歴史上圖畫ノ示スナク記録ノ
存スルナキ事項ヲ一目ニシテ推考スルニ難カラズトナス考古學上ノ調査ニヨレ
バ是土物ハ其種類左ノ如シ

一人形、男女アリ、男子ハ兜ヲ被リ劍ヲ帶ビ鎧ヲ着シタル武夫アリ女子ハ頬
紅ヲ施シ結髮耳ニ環ヲ穿チタルアリ、垂髪帶ヲ纏ヒ器物ヲ提ゲタル
アリ、

一 馬、馬ハ小鈴ヲ附シ充分裝ヘルアリ、胸ニハ鐸ヲ下ケ、背ニハ鞍ヲ置ク鐸ハ輪鐸ニシテ鈴附ノ轡ヲ啣メルアリ、

一 牛、牛ハ馬ト異ニシテ一ノ裝飾ナク單簡ナリ、其他水鳥、兔、雞、猿、猪アリ、鞶、楯、劍、弓ノ如キ器具アリテ埴製ノ圓筒ト古墳ノ周圍ニ配列セラル、仔細ニ其種類ヲ説クハ専門ニ涉ルヲ以テ畧ス、是等ノ遺物ハ偶然ニ今日存在セルモノニシテ大ニ史學研究ノ一端ヲ補益スルヲ少シト爲サマルナリ、曲玉ノ裝飾法ノ如キ手玉ヲ附セル狀ノ如キハ埴輪土偶ニ據ラズンベ後世ヨリ全ク推考シ得ザルナリ、次ニ尙數例ヲ舉ゲテ史學上ニ與フル遺物ノ裨益ヲ示サンヲ欲セシガ以上ノ銅牌及ビ銘文又ハ石鎚、埴輪ノ實例ニ止メ本文ノ大意ヲ示スニ充分ナリト考フルヲ以テコ、ニ筆ヲ擋ス、

コ、ニ記シタル石鎚埴輪樹物ノ現品ハ東京帝室博物館、又ハ東京帝國大學人類學教室ニアリ参考ノ爲メ記ス、

○南米ペルウノ結繩ト琉球ノ結繩

所謂上古未ダ文字アラズ、大事ニハ則チ大繩ヲ結ビ小事ニハ則チ小繩ヲ結ビ以テ之ヲ記ストハ支那ノ結繩ノ様ヲ記シタルナリ、結繩ノコタル世界ノ中ニ於テ獨リ支那ニ行ハレシモノナルカ、野蠻未開ノ人民が物ノ數ヲ記シ物ノ意ヲ通ゼント欲セバ勢ヒ一ノ記號ヲ製作セザルベカラズ、南アメリカ、ペルウノ結繩ノ如キ其一例ナリ佛人「ペルチーヨン」氏著人類學書中ノ一節ニ曰ク

ベルウ國土人ガ文字ノ使用ニ蒙昧ナリシ一端ヲ舉ニハ此處ニ「クイボ」ト唱フル一記號アリ、是ハ條索ノ組織ニヨツテ成ルモノニシテ其各節各標ハ備忘的ノ意味ヲ表示スルモノナリ、其用途ハ則チ人民ノ統計、土地ノ所領標、各種族及ビ兵卒ノ標號、其他刑法上ノ「」及ビ宗教上ノ儀仗標等ニシテ此「クイボ」ノ各種類ハ其村邑ニ於テ各種類ヲ異ニシ「クイボ、カメヨスト」稱スル専門博士アリ（記標學師ト云フガ如シ）

其記標ハ種々ノ方法アリト雖モ專ラ用ユルモノハ色彩ヲ以テ意味ヲ分ツモアリ即軍事及ビ兵卒ノ爲ニハ赤色ヲ以テシ黃金ノ爲ニハ黃色ヲ以テシ銀及ビ和

陸ノ爲ニハ白色ヲ以テシ玉蜀黍ノ爲ニハ綠色ヲ以テスル等ノ類ナリ又統計標ノ爲ニハ繩索ノ結節ヲ以テシ即チ單結、双結、三結等ヲ以テ其單數複數ヲ示シ即チ拾百、千等ノ數量ヲ算スルナリ

又牧畜家ノ用ユルモノハ一大繩索ヲ心軸トナシ之ニ數小繩ヲ附着シ其第一繩ハ牡牛ノ頭數、年齢等ヲ結節ノ數ヲ以テ表示シ第二繩ハ牝牛ノ爲ニシ第三繩ハ犢牛ノ爲ニシ其次列ノ繩ハ羊ノ爲ニスル等ノ類ナリ又一種ノ「クイボ」ハ種々ノ出納標ニ用ユルモノアリ例ヘバ牛乳、乾酪、毛布等賣買ノ節等ニ於テストアリ、「クイボ」ノ圖ハ「歷史前ノアメリカト云ヘル書、人類太古史ト云ヘル書又ハ合衆國政府出版ニシテ非賣品タル人種學報告中ニアリ、又ベルウ征討史ト云ヘル書ニ曰ク

スペイン人ニ對スル叛逆黨ハ一千七百九十二年ニ組織サレタリ、此黨ハ木切レヲ携ヘタ使者ノ力ニテ組織サレタリ此事タル後ニ明亮トナレリ、木切レ間ニハ赤黒、青又ハ白ノ總ノ付イタ糸ヲ入レタリ、黑糸ハ四ヶ所ニ結節アリ、之シ滿月後四日目ニ此使者ノ徒黨ノ長ガ住居セルヴァツラヲ出立シタリト云ヘル意ナ示セリ

白糸ハ十ヶ所ニ結節アリ、之レ使者ノ到着後十日間ニ叛逆ノ實ヲ舉ゲントノ意ヲ示セリ此使者ヲ受ケシ者ハ叛逆ノ黨ニ加入セント欲セバ赤糸ヲ結ビ然ラザレバ青糸ヲ結ビテ返スナリトス、

同意ノ赤心ヲ示スニ赤糸ヲ用ヰ又ハ黃金ヲ示スニハ黃色ヲ以テストハ何地モ同ジ人情ナラズヤ、南米ペルウノ結繩ハ現品ヲ目前ニ見ル「能ハザルモ琉球ノ結繩ハ今日東京上野公園ノ帝室博物館又ハ東京帝國大學人類學教室ニ保存セラレ見るコト得ベシ左ニ之ヲ述ベシ（詳細ナルコハ東京人類學會雜誌第六卷ノ學友田代安定氏ガ記サレシ考說ヲ見ヨ）

琉球ニ行ハル、結繩ハ藁算ト稱、スペシ其結ビ方ハ指示格ニテ示セルモノ過半ナリ會意格ニテ示セルハ漸次消滅ス、指示格トハ凡ソ何ニテモ其指示スル所ノ事物ニ就テ之ニ應スル標號ヲ設ケ、コレニヨツテ物品交換タリ租稅割賦法タリヲ會得セシムルニ供ス、其一例ヲ舉ケレバ

譬ヘバコ、ニ一村落アリ巡回吏來リテ村民ニ問テ曰ク此村ハ現今戸數人口幾何ト此際村吏ノ答フルニ戸數何戸、人口何人ト文字ニテ記スル代リニ此結繩法

ヲ以テスル「アリ又一農夫アリ本年ノ收穫米何石何斗何升ナリシコトヲ記シ置カントスルニ文字ヲ知ラザルモノナレバ此記標ヲ用ル」アリ其他總テ計算上ニ用ルコト多シ

次ハ會意格ノコト云ハシ、會意格トハ凡ソ何ニテモ其目的トスル處ノ事物ニ就テ之ニ應スル記號ヲ設ケ置キテ己ノ意ヲ人ニ通シ人ノ意ヲ自ラ悟ルヤウニシテ言辭文書ノ用ニ充ルモノナリ、即結繩法ノ本格ニシテ支那上古ノ結繩ノ餘風ヲ存スルモノナリ、今其一例ヲ舉ケレバ

譬ヘバコヽニ田圃ヲ痕籍スル児漢アリ之ヲ防ク爲メニ文字ヲ記シ示サントスルニ自己モ其道ヲ解セズ彼モ亦之ヲ解セザルベシト思フ際此結繩ヲ用テ其意ヲ曉ス「アリ又コヽニ一人アリ物品ヲ他人ニ借シタルトキ其數量ヲ記シ置ク際ニモ文字ニ代用シテ此結繩ヲ用ユル」アリ

右二格中ニ於テ多ク言辭文章等ノ如ク意思ヲ通スルノ性質ヲ具シタルハ會意格ニシテ專ラ算數若クハ統計表ノ如ク眼前ニ存スル有形的ノ事ヲ示ス性質ヲ具シタルハ指示格ナリ

然ラバ琉球結繩ノ用ヰラレタル種類如何ト云ハシ

計算用 人夫使役用 年期類別用

等ニシテ結繩ノ材料ハ藁ノミナラズ藤ノ蔓、又ハ草ノ莖及ビ種々ノ纖維又ハ木葉ヲ以テス

學友田代安定君ハ布畦ニテモ結繩ヲ用ユル土人ヲ見タリト余ハ本邦陸奥國津輕郡内秋田縣トノ境ナル山中ヲ跋涉シ樵夫ノ會意格ト指示格トノ記號ヲ用ユルモノヲ見テ詳細ハ東京人類學會雜誌ニ登載シオケリ、支那ニ於ケル結繩ノ法ハ今日知ルヲ得ザルモ此等ノ諸國ニ行ハル、結繩法ヲ推考セバ大意ヲ會得スルニ於テ難キニアラザルベシ、又田口博士ノ太古ト蒙古ノ骨占ノ研究ノ類ハ予ノ最好ム所予モロヲヒル氏ノ西藏紀行ハ所藏セリ

史學ヲ修ムルモノハ斯ノ如ク關係セル諸學科ガ日ニ進ミ行クヲ以テ毫モ油斷ナク共ニ其一班ハ窺ヒオカザルベカラズ然ラザレバ無用ノ勞ヲナシテ却テ他ノ學者ノ笑ヲ招クナキニアラザレバ土俗學、人類學、考古學ノ如キハ史學ヲ修ムルモノ、一班ヲ解シ置カザルベカラザル學科タリ史學家ノ前途亦遼遠ナリト云フベシ

○印度瓜哇風俗抄

私ノ友人中ニハ印度、瓜哇ヘ渡航シ錫蘭、孟買ヲ始メ北方ヒマラヤノ山麓ニ至ル迄跋涉セシ人アリ又バタヒヤ等ヘ渡航シ種々ノ用器、寫眞等ヲ携帶シ歸朝シタル爲メ大ニ學術上ノ助トナルベキ談話ヲ聽キ從來筆記シテ参考ニ供シオキタルガ早晚弘ク世ニ示シテ史學、考古學、人類學、又ハ東洋ノ風俗ノ一斑ヲ知ラント欲スル人々ニ割愛セント欲セシガ、前號ニ横山君ガ朝鮮物語抄ノ記載アリシヲ以テ今回ハ印度、瓜哇風俗抄ト題シテ記スルコトセリ

日本ヨリ歐洲ヘ行ク入ハ通例シンガポールニ上陸シ次ハペナン港ニ次ハコロンボニ寄港シ更ニポンベイ迄至ル近來日本ヨリノ航路開ケ郵船會社ノ滙船ハ此間ノミ特ニ往復スルニ至ル、友人田代、武田等ノ諸氏ハベナン、コロンボノ兩港ヲ經テポンベイニ至レリ、抑コロンボトハ椰子ノ港ト云ヘル土言ニシテ、ペナンハ檳榔ノ港ト云ヘル土言ナリ、コロンボヘ首府ノ遷サレザリシ以前繁盛ヲ極メシ、カンマー

市街ノ山奥ニアダムスビーキト唱スル高山アリ、即チ東洋ノ偉人釋迦ノ修法セシ所ニシテ支那人ノ所謂靈鷲山ナリ斯ル佛徒ノ跡故ニ莊嚴ナル寺院多シ、竹田氏ハ此カンマーニ宿泊シタルガ其旅宿ノ傍ノ一寺ニ至リ見タルニ左ノ如シト
釋迦ノ像ハ吾邦ノ像ニ同ジク寺僧モ吾邦ノ如ク剃髪ナリ、然ルニ全身ニ衣服ヲ纏ヘルハ寺僧ノミニシテ其他ノ人ハ都テ裸躰ニシテ佛前ニハ大鼓ヲ敲テ譁シ參詣人ハ椰子ノ花(花ハ黃色ニテ細長ク縷糸ノ如シ)ヲ捧ゲテ吾邦ノ百度參リノ如ク、幾度モ佛前ニ到テ敬禮ス、亦堂内ニ竹ノ平笊ニ紅白黃ノ花ヲ並ベテ賣レリ、此笊ハ徑七八寸ヨリ一尺迄大小アリ參詣人ハ是ヲ買テ佛前ニ供ス、椰子ノ花ヲ持ツモノハ婦女ニ多シ

セイロンニテ印度人ノ經文ヲ書スルモノハタリボット樹(Talipot)ノ葉ヲ用ユ此生葉ニ鐵筆ニテ經文ヲ書ス筆ノ尖ノ至ル所黒色ニ變シテ文字著ク顯ル、佛寺ノ門前ニテ僧侶胡座シテ經文ヲ此生葉ニ書シ居ルアリ、此葉ハ櫻櫛ノ葉ニ似テ大ナル故ニ土人ハ此葉ヲタマミ持テ歩行ス、本邦人ノ雨傘ヲ持ツト等シ雨來レバ是ヲヒログテ躰ヲ掩ヒ雨ヲ避ク此樹ハ椰子科中尤大ナルモノナリ、我邦ノ帝室博物館ニハ

此葉ニ經文ヲ書セザルモノト鐵筆トアリ、又既ニ舊々經文ヲ書シ一束ニセシモノ
百三十枚アリ友人ノ所持セルモノニハ一束二百四十三枚ナルアリ中央ノ左右ニ
二孔アリ糸ヲ通ジテ結ベリ、前後ニハ短冊形ノ板ヲアテタリ今日予ハ田代氏ノ實
見ヲ聽クニ左ノ如シ

(前略)セイロンノ桂園ヨリ一英里バカリ三十分ニテ一寺院ニ達ス、此寺院^{ムアト}
ミタミヒアルト稱ス土僧幼老五六名アリ机ニ凭テ貝多羅經ヲ閱ス皆剃髮跣
足ナリ、黃色ノ綿布ヲ右肩ヨリ左腋ニ纏ヒ掛ク(勝邦日釋迦佛林ノ)
ヒ亦然リトス)一僧余ヲ導キ
一伽藍ニ至ル樓上ノ一隅ニ釋迦ノ木像ヲ安置ス其前ノ机上ニ貝多羅經數帙ヲ
置ク一帙ハ數葉ヲ重子テ糸ニテ綴リ其兩邊ヲ木板若クハ象牙等ニテ蓋ヒ閉ヅ、
我梵經モ元ハ是等ヨリ溢觕セシモノナルベシ其上等ノモノハ金泥ヲ以テ字ヲ
塗リ若クハ花紋ヲ書ケルモノアリ、又粗ナルモノハ更ニ修飾ヲ加ヘザルアリ、一
卓上ニ日本ノ經帙二篇アリ其中ニアル梵字ヲ出シ示セシニ是ハ印度文字ニシ
テ我等ガ用ユル所ト異ナリト答フ、一隅ニ書架アリ多ク西洋ノ經典ヲ藏ス、云々
日本ニテ紺紙ニ金泥ニテ經文ヲ書シ、又銀泥ニテ經文ヲ書スルモノ藤原時代ニ大

ニ行ハル、モ右ニ云ヘル原因ニ基タルモノナリ、
印度人ハ跣足ト云ヘルコト多ク記スル處ナルガマドラスノ中流以上ノ人をハ下
駄ヲハケリ、其形ハ一見瓢ヲ縱斷シタルヲ平面ニ見タル形ニテ東京ノ帝室博物館
ニモアリ、幅ハ前方廣ク、後ノ方ハ狹シ、鼻緒ノ孔ハ前ノ一孔ハ左足ノ分右ニ、右足ノ
分左ニ偏ス、後ノ二孔ハ下駄ノ側面ニアリテ貫通セリ、齒ハ造リツケナリ、緒ハ皮ナ
リ、我邦古代ノ古墳中ヨリ同形ニテ石ニテ摸造セル下駄ヲ發見セルが前鼻緒ノ孔
ノ位置左右ニ偏セルヲ同ジ又木製ノ同孔ノ下駄ヲ發見ス(後ノ孔ハ石製モ木製アリ)木製
ノ分ハ全形小判形ナリ、

ロマラヤ山麓ニ住スルブータン人ハ佛寺ニテ異様ノ面ヲ被リ奏樂ス、寫真ヲ上ニ
示ス、右方ノ面ヲ被レル人ノ服ノ胸ニアル畫ハ日本ニテ蕃畫ト稱ス、舞樂ノ服ニア
ル畫ナリ、樂器ヲ奏スル人ハ日本ノ神官ニ似テ烏帽子様ノモノヲ被ル、奏樂ナルモ
ノハ元來佛樂ヲ始トス、日本ニ伎樂面トテ正倉院等ニ藏シアル面中ニハ印度舶載
ヘモノアリ、舞樂ノコハ瓜畦ニ存スル躍ヲモ共ニ考フベシコトニハ略ス、別項ニ記
スルコト、ナス、

又シムラト云ヘル地ハ印度北部ノ寒地ナルガ土人ハ仕立タル衣服ヲ着ルモノナ
ク多クハ廣キ布ヲ頭ヨリ軀ヘ巻キ纏フナリ此シムラノ人ハ特ニ頭ヨリクルミテ
顔ノミ出セリ達摩ノ像ハ是ニテ此地ニテハ何ゾ女ダルマノミナラン男女老若、色
ニヨツテハ青白紅黃隨意ナリ道普請人足モ駕ヲ擔フ男モ皆達摩ノ姿ナリ但シ土
人中中等以下ノ衣服ニ屬ス、

日本ニ玉蟲厨子ト云フ厨子ガアル大和國法隆寺ニ藏スル所聖德太子傳私記ニハ
推古天皇御厨子也トアリ又以玉虫羽以銅膠透唐草下臥之トアリ從來尊敬ノ餘リ
充分其細工ヲ究メザリシが明治廿一年官命ニテ或人仔細ニ構造ヲ檢シ玉虫ノ羽
ノ臥セアルヲ發見セリ又同寺ノ征矢ノ中ニ筈ノ裝飾ニ玉虫ノ羽ヲ附シタルアリ、
然ルニ斯ク玉虫ノ羽ヲ細工ニ迄用ユルハ熱帶地方ノ輸入品又ハ傳習ナルガ印度
マドラス地方ニ遊ビシ友人ノ携ヘ歸リシ團扇ハ今日東京帝室博物館ニ献ジ陳列
サレタルガ寶珠形ニシテ柄アリ周圍ハ孔雀ノ羽ヲ以テ飾リ中央ノ畫ノアルベキ
部分ニハ玉虫ノ羽ヲベンニ附ケシガ如キ形ニテ附シアリ日光ニ映ズレバ反射シ
テ美麗ナリ、今日コレ常用ノ團扇ナルガ所謂玉虫ノ團扇ト稱スペキモノ、蓋シ玉虫

ノ厨子ト云ヒ征矢ノ裝飾ト云ヒ斯ル花ヤカナル飾ハ從來日本人ノ意匠ニ適セザ
ルヲ見レバ又寺院ニ藏メアル厨子ニ此飾アルヲ見レバ厨子等ハ上代印度支那ヲ
經テ本邦ニ舶載セシモノナルベシ斯ルエスグラブロ土俗學上ノ研究ハ從來疑問ニ附セラレシ
事項ヲ打破シ氷解セシムルノ効アリ

次ニ示ス寫眞ハ印度ノ一種族中ヴェダ(Vedah)ト稱シセイロンノ東部ニ住スル種
族ナルガ美術家ノ繪ニ多ク見ル所ノ「出山ノ釋迦」ノ圖ト題スル釋迦ノ容貌ト異ナ
ルナシセイロンハ釋迦降誕ノ地今日其風俗ノ變化セザル此人種ノ容貌ト相似タ
ルハ理ノ然ルヲ見ルベシ、

印度ノ古寺様ノ家ノ側ニ土燒ノ馬象ヲ並ベタリ、大サ尋常ノ大サニシテ燒キ方モ
今戸燒ノ如ク古風ナリ、多數ノ處ハ數十並ベリ、本邦ノ鳥居ヲ建テ神ニ賽スルモノ
、如シ、斯ク大ナル燒物ヲ製セシコト驚クニ堪ヘタリ、コレ武田氏ノ實見セル所、又
カルカッタ府ニテ用ユル樂器ハ

エスラール

五十絃ヨリ百絃ニ至ル是ヲ彈スル土人ノ女ハ一夜ニシテ巧ナルモノ凡我

貳拾五圓ヲ得

セタール、六七絃アリ形狀長シ

サーング、ヨスラールノ類ナリ、

ベラ、實物ハ東京帝室博物館外國風俗室ニ陳列サレタリ、

バシリ笛、兩三種アリ

團扇ノ必要ハ熱帶國ニ特ニ生ズベシ印度ノ團扇ニハ三種アリ角形ト丸形ト寶珠形ナリ、椰葉ヲ以テ製シタルハ角ト丸トナリ、孔雀ノ羽ヲ周圍ニ裝ヒ赤キ布片、玉虫ノ羽ヲ加ヘテ中央ノ部分ヲ飾リタルガ如キハ中等以上ノ人ノ用ユル所ナリ、

セイロンニテ土人ノ一般ニ用ユル土器ハ壺ノ形ヲナス、種々彩色ヲ施シ美麗ナレ

テモ質甚ダ脆シ、セイロン語ニテ「モテ」ト云フ

印度ノ北部ダーリン街ニ限り通用セル銀貨アリ一バーイ(凡我七毛)ト二バーイ(凡我六毛)ノ二種アリ其形狀ハ厚サ二三分ノ銅ヲ形ヲ定メズ截リタルニテ角アリ槽圓アリ一バーイト二バーイノ量目ノ差モ正シカラヌ様ニ見ユ此銅貨ヨリ以上ハ尋常ノ印度貨幣ヲ用ユ全ク此ダンジリーン山中ニ限ラル其山麓ノ村々ニテハ通

用セザル「ナリ、日本ニテモ板金トテ金ヲ切り通用セシマアリ、甚ダ相似タリ、印度モンブー幾那栽培場ニテ使役スル土人ハ諸部落ヨリ入込ムが故ニ言語モ種々アリ、凡五種ニ分ツ、外來人ニハ此附近ノ言語ヲ知ルニ最モ便利ナリ、

バハリヤ語 Paharia.

レアチャ語 Lepcha.

シムラノ北方レブチョン部ノ語也、

コングー語 Hindu.

即チ純然タル印度語也、

ベンガリ語 Bengale.

北地トヘ云ヘヒマラヤ山以南也

アーチャ語

Bhutia.

アータン部ノ語、

ダンジリン「アータン」部落ニ接近セル故此地ニ來リテ勞働スル者ハ「アータン」人多シ其衣服ノ躰ヲ云ハマ襟ヲ前ニテ合セ琉球人ノ如キ多シ、顏色モ印度人ノ如ク黒カラザル故ニ一見琉球人ト思ハル、程ナリ、婦女ハ琉球衣ノ如キ上ニ單衣ヲ着シ腰帶ヲ強ク縛ルカ故ニ腰ヨリ以下ハ廣ガリテ日本ノ浮世畫師ガ神代ノ何々ノ尊ナドヲ畫キシ風ニ於テ見ル處ナリ、上等男子ノ服ハ前記ノ如キ仕立ナルモ萌黃羅紗、茶羅紗等ニテ異様ナリ、昔時日本ニテ江戸神田祭ニ於テ見ル處ノモノニ等シ

キアリ、婦人ハ力役スルモノノ諸品ヲ脊ニ負フニ吾邦ノ脊負板奥州、信州、甲州、越後等ニテ用ユルニテ負
フ如斯貧窶見ルベカラザル女子ト雖モ襟掛ハ必ス爲ス此襟掛ハ多ク印度ノ貨幣
ニテ一「リュビ」又ハ半「リュビ」ヲ貰キ掛ク女子ノ身代ハ襟掛ニテ知ラル、ト云フ、言
語ニ一種ノ方言アリ、外人ノ伴ヘル通辯ニハ解シ得ズトゾ。

印度ノ風俗ニツキテハ抄出スペキ項ヲ止メ左ニ瓜哇風俗抄ヲ記スペシ
瓜哇ニテ製作シタル農具、山刀、槍、樂器等ノ雛形ハ友人竹田氏ノ持チ歸リテ東京帝
室博物館外國風俗部ニ陳列シアリ人類學上同地方ノ風俗ヲ知ラント欲スル人ハ
一見スペキ雛形ナリ。

Dan Dang

マレイ語、

此ダンダントテ銅ニテ製シタル丸キ壺ノ如キモノアリ、是ニ丸キ竹製ノ籃ヲ添フ
瓜哇全島米ヲ炊ケニ皆此器ヲ用ユ銅器ニ水ヲ沸騰セシメ竹籃ニ米ヲ盛リテ銅器
ニ入レ炊シクナリ、此地ノ歐洲風ノ旅店及ヒ支那人ニ至ル迄近來ハ一般ニ此器ヲ
用ユ、日本ノ釜ト相似タリ（此器モ東京帝室博物館ニテ見タリ）

ペーイキトテ木綿布アリ地ニ蠟ニテ下畫ヲ畫キ諸種ノ染料ヲ以テ染メタリ瓜

哇島ノ男女皆此布ヲ用ユ、日本ノ古代ノ布片ニ蠟ニテ下畫シ染料ヲ以テ染メシモノアリ或ハ瓜哇邊ヨリ來リシニハアラザルカ（此布ヲ製スル風俗モ同博物館ニテ
寫真ヲ見タリ）婦人ノ襟ニ掛け裝飾トセルハ凹凸紋アル桃核ニ似タル小キ丸キ實
ナリ、糸ニ貫キ長キハ二尺餘ニ及ブ

ペタピヤ古物館ハ陳列品頗多ク皆瓜哇島ノモノニ係ル昔時此地ノ王ノ用ヒシト
云ヘル倚子アリ、全軀厚キ純金ヲ用ヰテ被ヒタリ背ノ觸ル、所ハ一層厚キ純金ノ
彫刻ヲナシアリ、又純金ノ華アリ其他器皿、首飾アリ丈三尺餘ノ佛像アリ銅器ノ部
ニモ種々珍ラシキ物アリ、今其中ニ一種ノ鐸鈴アリ、他國ニテ見ザルモノナリ、日本
ノ東京ニテ市中ヲ大神樂ト唱フル者ノ獅子舞ニ用ユル如キ獅子ノ假面アリ、コレ
ハ瓜哇ニテ古代ノ戰爭ニ被リテ敵ヲ恐嚇セシモノト云フ其他古代ノ戎器、鎗盾ノ
類多シ、又極メテ古代ノ樂器アリ土言「アンコル」ント云フ竹筒花瓶ノ如ク竹ヲ切り
テ長短五本ヲ竹ノ框ニツルシ此竹ノ切口ニ細キ竹ヲ入レオキ此框ヲ動カシ音調
ヲ發ス實ニ素朴想フ可シ

瓜哇ノ舞樂中日本ニテ行フ舞樂ノ兜ヲ被リテ舞ヘルモノニ其マヽノモノアリ、コ

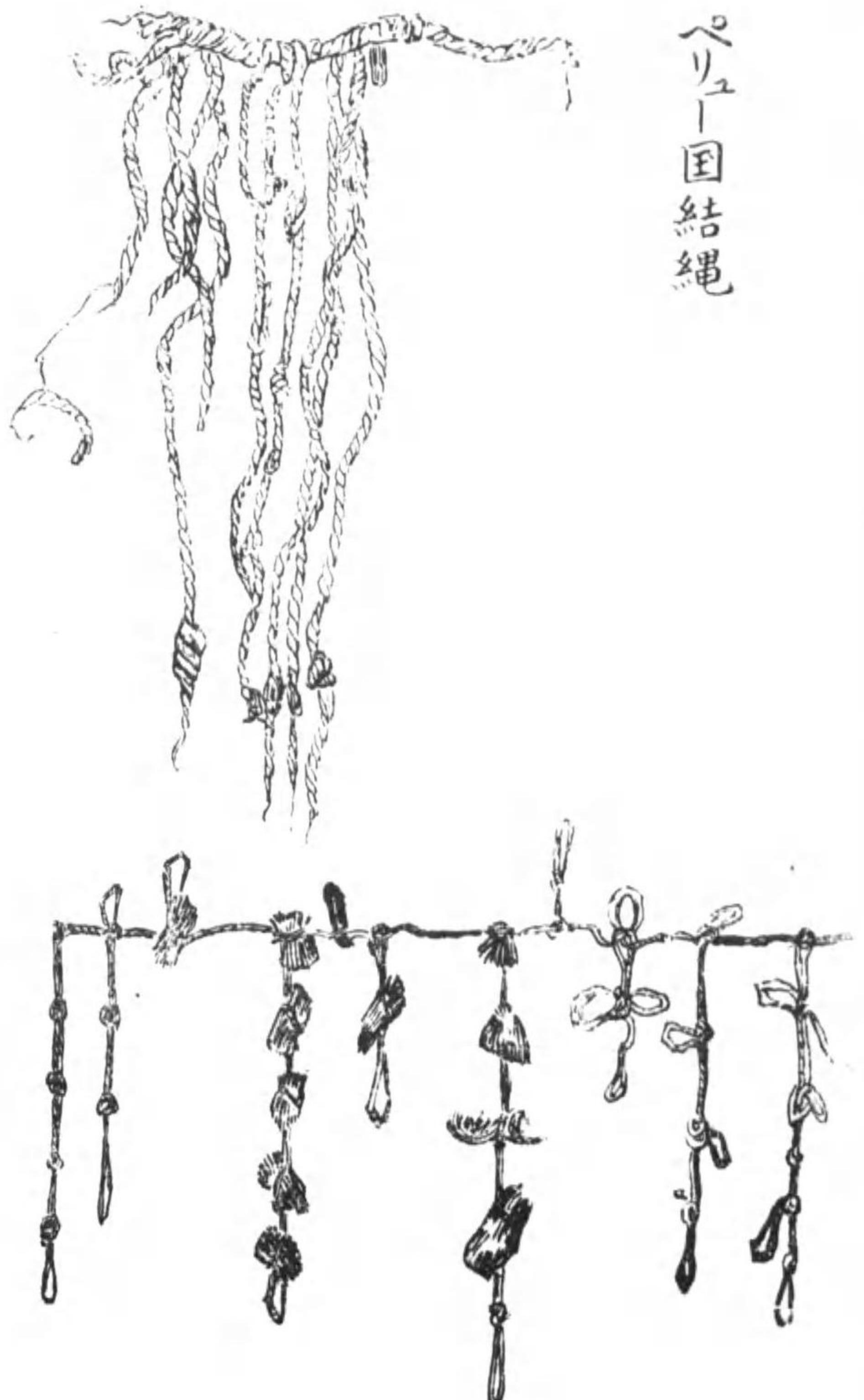
レ支那ノ舞樂ノ日本ニ傳ハレルナレバ支那ヨリ瓜哇ニ傳ハレル風俗ナラント言
フ人アラン、然レ支那ノ舞樂トモ少異アリ彼ノ印度地方ヨリ此度ノ群島ニ一軀
ニ舞樂ノ行ハル、ヲ見レベ支那傳來ノ風ナラント云フヲ得ザルナリ、東京上野博
物館ニ此寫真アルヲ見ル又印度セイロンニテ釋迦祭祀用ニナス木面アレア皆眼
大ニシテ全形陵王ノ面ニ似タリ、参考スペシ。

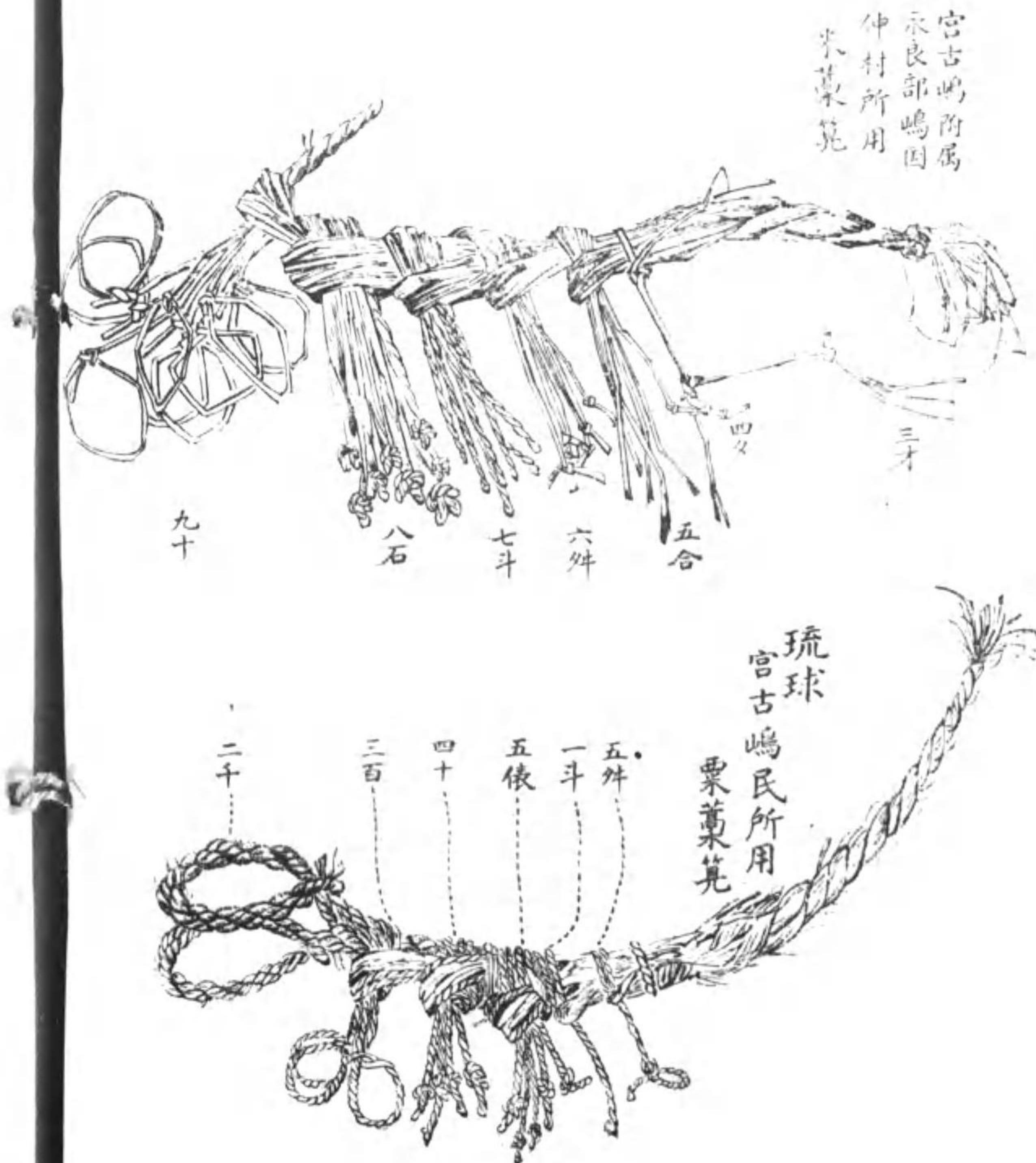
瓜哇ヲ始メ東印度諸島ノ土俗品ハ昔時和蘭人ノ領セシガ爲メ今日和蘭ノ本國ナル博物館ニ諸種ノ蒐集品アリ、年ニ二三回此等諸島ノ記事ヲ載セタル報告ヲ今日尙刊行セリ、此報告書類ハ帝國大學ニモ來リ東京人類學會ニモ交換トシテ來レリ、我邦ノ風俗ト相待ツテ参考スペキ點少カラザルナリ、又シンガポールノ博物場ニモ此地方ノ採集品アリ他日紹介スペキ時アラン。

○南米ペルウノ結繩ト琉球ノ結繩補遺

左ノ四圖ハペリュー國ノ結繩兩種ト琉球國宮古島ノ米粟ニ關スル結繩二種トナリ、

ペリュー國結繩





一見セバ大畧ヲ了解スルニ於テ足ルベシ、但シベリュー國ノ結繩二圖ハ地中ヨリ發見シタルモノナレバ今宮古島ノ現用品ノ如ク明カニ各結ビ方ニツキ意義ヲ指示スル能ハザルナリ、而シテ前文ニ佛人ノ記スル所ヲ舉ゲタルガ色ニヨツテ數ヲ示ス點ヲ記シ漏ラセルヲ以テ更ニ米人ノ記スル所ヲ譯シテ補ヒオクベシ、綠ヲ以テ彩色サレタルハ千ヲ示シ、赤ヲ以テ彩色サレタルハ百ヲ示シ、黃色ハ拾ヲ示シ白ハ拾以下ノ數ヲ示スナリ、余ハ右ニ示セルベリ、國結繩圖ノ外更ニ他書ヨリ得タル圖ヲ今回擧行セル遞信省郵便紀念二十五年回展覽會ニ出品シタリ此圖ハ追テ插入スペシ、此圖ニハ結繩ニ彩色ヲ施セリ、赤、黃、綠ノ三種ヨリナリ、コニ東京帝室博物館ニ陳列シアル結繩ハ何人モ上野公園散歩ノ際見ルヲ得ルヲ以テ其種類ヲ記シ置クベシ、

(村算) コレハ戸籍帳ナリ、其結ベル義ヲ説明スレバ士族ノ十五年未満ノモノ、數ト十五年ヨリ廿二年迄ノモノ、數ト二十三年ヨリ三十七年迄ノモノ、數ト五十年以上ノモノ、數トヲ示セリ

記シオクナリ、

(糞算)此名稱ヲ附シタルハ數種アリ

(上布算)納稅ニ用ユル上布ノ計算帳ナリ

(かなぐつ)藤蔓又ハ葡萄蔓ノ類ニ結繩ヲ添エタルモノ、路傍ノ通行止ノ印^{シルシ}ナリ日本ノ内地ニテ通行止ノ札ヲ建ツルが如ク此かなぐつノ掛ケアル處ハ通行スル能ハズ、若シ強テ通行セバ罰セラル、ナリ、

ベリュー國ノ結繩ノコト琉球國ノ結繩ノコダケヲ記述シ完結セントセシガ序ヲ以テ他ノ國々ノ結繩ノ大畧ヲ記シオクベシ、

チベット國ハ從來結繩ヲ用ユ、同國ノ北部ナル人種中ニモ結繩ヲ用ユレドモ未だ用法ヲ詳記スル能ハズ、布畦ノ收稅者ハ住民ヨリ集メシ各種ノ物品ノ總數ヲ結繩ニテ記シオケリ、チモール島ノ人民モ千^{モチ}ヲ記スルニ繩ヲ以テシ千^{モチ}以下ノ數ハ扁平ナル石ヲ用ヰテ計算ス支那ノ海南ノリト云ヘル人民ハ文字ヲ知ラズ結繩ヲ用ユ、シベリアノ人民中ニモ結繩ヲ帳簿ニ用ユ、ダイアナノ印度人ハ他出スル際我が妻ニ結繩ヲ與フ其結繩ノ一部分ハ滯在ノ日數ヲ示シ、一部分ハ不在中

妻ノ用ユル曆ヲ示スト云フ、

發音ナシニ言語ヲ書クノ而シ思想ヲ表現スルコノ巧妙ナル方法ハ結繩ナラン斯ノ如ク世界ノ各處ニ結繩法ノ遺存セルコハ石器時代ノ遺物ガ世界ノ各處ニ遺存スルニ同ジト云フベシ、東洋ニテハ結繩ト云ヘバ支那ノ古代ヲ想起スルモ西洋ニテハクイボ(結繩)ト云ヘバ直ニ南米ベリューノ古代ヲ想起スルナリ、因テ本文ヲ艸シテ諸君ノ一讀ヲ煩ハセリ、

○日本ニ現存セル銅鼓ノ歴史及ビ其種類

第十五號ノ講義錄ノ卷頭二葉目ニ掲ゲアル寫真及ビ坪井氏ノ史學研究法二三八頁ニ記述シアル銅鼓ノコニッキ最歷史上参考トナルベキモノ三個ヲ選ビテ逐次講述センニ、今日日本ノ華族又ハ博物館ニ所藏セル銅鼓ニシテ其種類ヲ異ニシタルハ尙更好都合ナリ、支那ニ旅行シ暹羅ニ渡航ノ勞ナクシテ坐ノ其梗概ヲ知リ得ラル、ナリ、特ニ公爵徳川家ニ所藏セラル、銅鼓ニハ面白キ添書サヘアリ河間ト

云ヘル一家ノ歴史モ附屬シタルハ當時明末ノ際日本又ハ粵國ヘ隠レタル明朝イ
臣民ノ状況ヲ想像スルニ餘リアルベシ其添書ト云フハ左ノ如シ

唐大通詞河間八平治山緒書

私先祖代々福州に住居仕罷在候處明朝の末に至り韃靼のために國家大に亂れ
候に付韃靼の手下に成候はん事を歎き志有ものは粵國或は日本へ罷越候内私
曾祖父愈惟和事も御當地へ罷越其節家財道具共に持渡り明朝の成行を同居候
得ども終に韃靼の國家と成候を承り御當地住居之儀奉願蒙御免住居仕候其後
家書等は類焼又は紛失仕候へども銅鼓一面持傳へ罷在候處寛文十二子年劉大
成と申す唐人罷越右銅鼓之儀及承致一覽其後唐國へ罷歸候以後尙又劉大成申
越候は此大鼓日本に有之候ては無用の器にて可惜事に候北京より望まれ候間
遣し候様に申聞其頃居合せ候唐人共も達て相進め候へども不差遣候由申傳へ
候處享保三戌年林雲瞻と申す唐人私父八平治直俊時分罷渡り此者唐國に於て
諸葛鼓致一覽候儀有之由にて私方持傳へ候諸葛鼓の形狀寸法並に音聲を考へ
唐國にて一覽いたし候にも少も無相違諸葛亮所製之退邪鼓無疑珍器の由にて

別紙諸葛鼓の記文を認め父八平治へ相與へ候以來珍器の譯も治定仕候に付彌
大切に所持仕罷在候儀に御座候

巳正月

河間八平治

右文中にある別紙林雲瞻の記文といふは左の如し

侯官林雲瞻草

漢の諸葛武侯の列傳に書載あるを考るに南方の猛獲を征伐の時銅鼓二十面餘
を鑄るこれ世間に用ふる物にあらず又軍中の刁斗の類にもあらず武侯不毛の
地に入り始めて此器を造るとなり歩擊するものあり圓さ五尺高さ一尺馬擊す
るものなり圓さ三尺高さ六寸にて上は平らにして中は空しく鏤紋鼓の耳にあ
り(鏤紋は鑄附の鳥紋様)大なる音遠く聞ふ怪獸を驚かし瘴烟を拂ふ物の神ある
も即ち武侯の神なるなり南蠻を平ぐる後多くは谷の流沙深き所に置く鎮壓す
る事なり金と水と涵し應ずる儀なり晋朝魏朝五代の時唐朝宋朝の間千四五百
年を過て滇中の土民(滇中は蜀の地)時ありてこれを得たるより世間に此品あり
質化し色も異なり公卿大夫買求むるもの千金を惜まず近代の至寶といたすな

り予先頃五年の間都に在りて諸王公の宅へ曳れ一面を見るとを得たり人之を奇遇といふ重んずる事周鼎商彝に比ふべし(商彝は殷の時の宗廟の器なり)眞翁先生の家に一面所持あり此品東方へ來りて八十年餘に及ぶ見るもの知らざるにより樓の側らに置くといふ二人の童子に持せ来る予これを見るに其形狀寸法を考ふるに大凡以前見し品と合ふことあり穆然として渾樸なり、朱閃綠沈元朝明朝以來のものにあらず則ち先生に向ていふ是は漢の諸葛の鼓なりと其根本をいへば先生坐をうつて之を撫し神なることを知る唐國にてすら容易く得がたし先生これを得たるは神ある物の人々寄ること風波を憚からず甚だ不思議なり八十年餘家に所持あり瓦漆と交り(瓦漆とは瓦或は塵をいふ)久しく塵を拂はず今日予證據を引き小記を述るにより日本にてそれを知る人あらば不朽の品たらん

右ノ他帝室博物館ノ外國風俗部ニ陳列シアル銅鼓ハ暹羅國內務大臣ダムロンケ親王ヨリ献納サレシモノナルガ其説明書一通ヲ添ヘラレタルヲ見ルニ左ノ如シ

マホラツック即チ銅鼓

此太鼓ハ全體青銅ニテ造ル暹羅人ハ「マホラツック」ト云フ、シャン人ハ「クロング、クッブ」ト云フ即チ蝦蟆太鼓ノ義ナリ、此太鼓ハレッド、カリエン種族ノミ製作スルモノナリ、此種族ハビルマノ國境北緯十八度半、東經九十九度十五分ノ地ニ住ス

此「マホラツック」ハ種々ノ大サアリ、極メテ大ナルモノアリ、又極メテ小ナルモノアリ、通例蝦蟆ノ形狀ヲ表面ニ壹個二個又ハ三個浮彫ニナス、此太鼓ハ儀式用トシテ印度支那人ニ必要ナリ、殊ニシヤムノ北方ニ住スルカリエン其他山地ニ住スル種族中ニ缺クベカラザル品ナリ、

シヤムノ都ニ於テハ古代ノ習慣ニヨリ帝室用樂器トス、即チ喇叭ト共ニ參朝セシ人々ニ皇帝ノ出御ヲ報ズルニ用弁又其行列ニ際シ皇帝ノ面前ニ於テ之ヲ擊ツ又此太鼓ハ寺院ニ於テ宗教上ノ儀式ニ用弁ラル、現今カリエン種族ガ之ヲ製作スルモ、此太鼓ノ種類中ニハ甚舊キモノモアリ、

現今暹羅都バンコクニ現存スルモノハ大抵帝室用ニ屬ス、

此説明書ヲ添ヘラレタル銅鼓ハ表面ノ徑貳尺〇五分、高サ一尺五寸五分、底ノ徑壹尺六寸アリ、表面ニハ四個ノ蝦蟆ヲ浮キ彫リトナス、兩耳アリ第十五號ノ卷頭二葉

メノ銅鼓ノ寫真ハ即チ此暹羅國ノ「マホラツック」ナリ

今此兩鼓ノ他ニハ大給予爵ノ銅鼓コレナリ、此銅鼓ヲ同氏ノ得タルコハ坪井氏ノ
予ガ紹介シタル文ヲ前號ノ講義錄ニ引用サレタレバ略ス此銅鼓ノ表面ニハ蝦蟇
ナキモ表面ニ十二支アリ、西清古鑑ニモ見ザルモノナリ、此鼓ノ面徑ハ一尺六寸八
分輪廓十一、高サ九寸四分アリ大給氏モ西清古鑑中ニ載スル十三圖ト似タリト云
ハレタリ、大給予爵ヨリ先年同氏ノ銅鼓考一冊惠與サレタレバ今日予ノ藏書中ニ
加フ)

此他余が羽後國仙北郡大曲村ノ小西家ニテ見タルモノアリ、コレ慶應三年羽後ノ
海岸ヘ漂着セシモノト傳フ、但シ表面ノ紋様ハ徳川家ノ銅鼓ト同ジキモ周圍ニハ
蝦蟇ノ浮彫ナシ、

以上記述セシ銅鼓ノオハ意外ニ長ク、又細點ニマデ立チ入りシガ各個ノ銅鼓ニサ
ヘモ少シク注意ヲナサベスノ如ク種々ノ歴史ヲ有シオリテ、坪井氏ガ述ヘラレシ
通リ、古器物ヲ史料トシテ極メテ不明ノ時代ノ穿鑿ヲ致斯時ノ心得ノ一材料トナ
スニ足ルベシ因テ其大要ヲ記述セリ、

○筑後國造磐井ノ遺跡

今日ヨリ溯ルコト一千三百餘年前筑後ノ國造ニ磐井ト云ヘルモノアリテ豪強暴
虐皇風ニ偃サズ因テ官ヨリ物部龜麤火ヲ將トシテ兵士ヲ差遣シ討テ平定セシメ
タリシガ此磐井ガ生前ニ豫メ造リ置キシ墳墓ノ跡今日其遺物ト共ニ存スルヲ以
テ筑後風土記ノ文ニ對照シテ實踐スルヲ史學上ニ有益ナルヲ認ムルト共ニ前號
日本宗教史ノ講義中ニモ古代墳墓ノ宏壯ナル好例トシテ示サレタルヲ以テ嘗テ
予ガ兩度迄同地ニ至リ調査セシ結果ヲ記シテ史學科攻究ノ一助トナサントス、
抑此遺跡ト云フハ筑後國久留米城下ヨリ南方羽大塚ト云ヘル汽車ノ停車場ノ東
ニ當レル福島町ヲ距ル一里許ノ處ニアリ、此福島町モ城跡アリ久留米城主ノ一族
ガ嘗テヨコニ城廓ヲ構ヘタリシ處ナリ、此城跡ヨリ北方ニ小丘ヲ望ムベシ、コレ磐
井ノ遺跡地ニシテ今日ハ八女郡長峯村ト云ヘル村内ニアリ、八女郡ハ新町村名ニ
シテ舊稱ハ上妻郡ト云フ風土記ニ上妻縣ト云ヘルコレナリ、歴史ヲ修ムルモノニ

三六

トリテハ新町名ノ改稱ハ郡名村名共ニ大ナル妨害トナルナリ、施政上ノ便利ヨリ論セラルレバ止ヲ得ザルモコレ其一例ナリ、

今此八女郡長峯村中岩戸村ト云ヘルハ即チ生前磐井ノ築造セシ墓ノ跡ニシテ此地ニ存セシ石人即チ墓ノ傍ニ樹テシ武夫ノ石像及ビ石盾又ハ石馬等ハ左表ニ示ス如クナルガ今日ハ各處ニ散亂セリ、其現存地ニツキ其數ヲ知リ得タルガ實ニ當時國造ノ勢力以外ニ豪強ナリシヲ推考シ得ベシ、又其墓ノ宏壯ナリシヲ想フベシ

(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	石人ノ種類	形狀	數	現存ノ場所
同	同	同	同	同	同	同	扁平石人	(立姿)	一個	東京帝室博物館所藏、
石人	石人	石盾	石人	石人	石人	石人	石人	同	一個	筑後國岩戸山ニアリ、
(同)	(同)	(立姿ヲ表面ニ刻ス)	(同)	(同)	(同)	(同)	一個	一個	一個	一個
一個	一個	一個	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同				

(八) 石人ノ首ノ部 (立姿ナラン)

一個 筑後久留米篠山神社境内ニアリ、

扁平石人 同
(立姿) 同

一個 同

(三)(二)
同 同
石人 石人
同 同

一個 同

(四) 同
同 石人
同 同

一個 豊後國日田ニアリ、

同 圓
石人 石人

一個
同

石同
石人
同

貳個
筑後國岩戸山ニアリ

同立姿

貳個
筑後國福島城趾ニアリ

筑後國造幣井ノ遺跡

(茎) (齒) (茎) (齒)
同 石人 (立姿)
一個 同
石馬ノ後部 (同)
一個 筑後國福島町正福寺ニアリ、
圓軀石人 (同)
貳個 同
石 盾 (立姿ヲ表ニ刻ス)
一個 東京帝國大學ニアリ、
扁平石人拾壹、圓軀石人六、首貳、
以上 石盾貳、石馬三、

石具參

右ノ表中(一)ニ示ス博物館ニ現存ノ石人ハ最大ニシテ高サ四尺幅ハ兩袖ノ間二尺
アリ石ノ厚サ六寸ナリ、而ソ墳輪土偶ノ歴史家ニ参考トナルガ如ク此石人モ美豆
良ヲ刻ミアリ小刀ヲ帶ブル風俗ヲ見ルニ於テ缺クベカラザルモノナリ、又(五)ノ石
盾ハ今日繪卷物等ニ見ル能ハザル處ニシテ表面ニ人形ヲ刻メリ、又石馬ノ鎧ハ埴
輪製ノ馬ニ見ル如ク今日ノ西洋鎧ト同一形ニシテ輪鎧ナリ、今日各府縣ノ地中ヨ
リ時ニ發見スル上代ノ鐵鎧ト一致セリ、馬鐸ノ形狀モ亦上代ノ青銅製ノ馬鐸ト同
一二刻メリ、(七)ノ石人ノ着用セル鎧ノ形狀モ參考トスペシ歴史書ヲ修ムルモノニ

トリテハ更ニ緊要ナリ、嘗テ田中氏ノ福島城ヲ再築スルニ際シ岩石山ヨリ石材ト
シテ石馬等ヲ採リ來リ石垣ニ用ヰタリ、コレ今日福島城跡ニ於テ見ルヲ得ルモノ
ナリ、

元來石人ヲ樹ツルヲハ支那ノ風俗ニシテ今日明ノ十三陵ノ前ニモアリ、又支那ノ
百漢研碑帖ト云ヘルモノニモ魯王ノ墓ノ石人ヲ縮摹シテ載セタリ、今日朝鮮ノ墳
墓中傍ニ石人ヲ樹ツルト雖モコレ支那ノ風俗ヲ學ヒシモノナリ、
九州ノ地古來ヨリ私ニ朝鮮支那ト交通ヲナセシモノ少カラズ、磐井ノ如キモ其一
人ナリシナラン、豪強暴虐不偃皇風ト筑後風土記ニアルモ僻遠ノ地ニアリシノミ
ニアラズ私ニ海外ノ援助ヲ得テ勢ヒ傲慢トナリシモノナラン、
此遺跡ノ圖ハ歴史教科書中ニハ往々見ル所又好古日錄ニヨリ近來ノ著述日本風
俗史等ニモ見エタルガ充分要點ヲ示サマルヲ以テコヽニ一班ヲ記シテ史家ノ參
考ニ供スルフトナセリ、

○ 校倉及ビ正倉院

校倉ノ最有名ナルハ奈貞正倉院ナリ、然レニ遠隔セルヲ以テ容易ニ見ルヲ得ズ、因テ歴史家ノ参考用トシテコヽニ近江國石山寺ノ校倉ト東京上野公園ニ存スル校倉トヲ寫眞ニテ示シ聊カ説明ヲ附スベシ。

東京上野公園ノ校倉ハ博物館内ニアリ左ノ寫眞ニ示セル形狀ヲナス、前面ニ小碑アリ此校倉ヲ奈良ヨリ移シテ學者ノ参考ニ供セシ所以ヲ記ス其文ハ次ノ如シ、

校倉記

此の校倉は、大和國奈良元興寺の別院なる十輪院の境内にありしを、明治十五年五月博物館に移せり。抑此の如き小倉を作りたるは、大般若經一部六百卷を藏めむためにつくりたるものならむ。しかいふ故は、平城坊目愚盲考に、十輪院は

眞言宗なり、傳云弘法大師開基にて其經藏の扉の兩面は四天王の像床下の石臺

は十六善神を彫むと見えたるにて、大般若の經藏なることのしらるればなり。

此の倉風火の災をのかれて今に存せることまことに稀有のものなり、然るを本寺衰へて修理することあたはず、故にこゝに移して舊物を保存し、且往古の建築

の方法を示す、

明治十六年六月

博物館

此校倉ハ博物館ノ後庭ノ池ニ架セル橋ヲ渡リ梅樹ヲ回リテ小丘ニ登ルニアラズ
ノバ見ル能ハズ、火災ヲ恐レテ斯ル後庭ニ置クモノナラン、故ニ多人數中少數ノ人
ノ外ハ本館ノ廣キニ足疲レ後庭ノ此建築物ヲ見ザルガ如シ、今コヽニ記中ニアル
十六善神ヲ見ルニ床下ノ四方ニ四人ヅ、配置シアリ、此石臺ハ昔ハ床下ノ四方ニ
ハナカリシガ一見ニ便センタメ床ノ四方ニ配置シタリ、扉ノ内面ナル四天王ノ像
ハ閉チアルヲ以テ見ルヲ得ズ余ハ嘗テ開扉ノ際コレヲ見タルコアリ、錠ハ天平式
其儘ニシテ錆ピタルモ参考上充分ナル材料ナリ、

次ノ寫眞ハ近江國石山寺ノ校倉ニシテ余ガ明治二十五年同寺ヘ至リシ際得ル所
幅ハ博物館ノ分ヨリ廣シ高サハ稍低シ、三角形ノ材ノ組ミ方及ビ錠ノ形式ハ相一
致セリ、斯ル校倉ハ安藝國ノ嚴島京都ノ東寺ニモ存セリ、彼ノ正倉院ハ斯ル校倉ノ
三棟ヲ壹ニ連續セルモノナリ、但シ正倉院ノ本來ノ用ハ次ノ如シ

大日本史食貨志ニ倉庫ノ種類ヲ舉ゲタリ

凡倉庫在京師者曰京庫、置於國郡者曰國庫、置於太宰府者曰府庫、續日本紀、類聚國

東大寺正倉院文書

庫有穀倉穎倉粟倉並貯大稅有郡稻倉納郡稻通謂之正倉

東大寺正倉院文書

ト然ラバ正倉院ハ正稅ヲ收藏スル倉院ナリ、而ソアゼくらハ名ニツキテハ伊藤東

涯ノ著ハシタル秉燭譚ニ詳カナレバ左ニ抄出ス、

近里ニ舟屋ト云工人アリ鳥飼翁ニカタリテ云北野ニ寶藏ト云倉アリ四角ナル
木ヲ積上テ造ル是ヲアゼリト云字ハ又ト云字ニ似タルヲ書クト云リト予思フ
ニ又木ノ義ニテ又ノ字ヲ用テ、ムカシ、アゼリト訓スルナルベシ、丁未ノ夏初白雲
山ニ上ル亦北野ノコトクナル寶藏アリ、導僧ノ云、コレヲ昔ヨリあせ倉ト云ト、コ
ノ比下學集ヲ見ルニ又庫ト書テあぜくらト點ヲ付セリ、コノ書ハ文安年中ニ僧
人ノ作ナリ、シカレハ昔ヨリ義理ヲ考譯シタルニヤ、今ハ知ル人モ少クナシトア
リ、今正倉院ノ構造ヲ拜觀スルニ全クコノ又庫ノ制ナルニ似タリ、床椽甚高クシ
テ殆ト七尺ニ過ケ梯子ヲ用ルニ非レバ戸内ニ入ルヲ得ズ、京都東寺ノ寶庫モ亦
コノ又庫ノ制ナリ、椽ノ高キハ濕氣ヲ禦ギ、又又木ノ間隙ヨリ微ニ空氣ヲ流通シ
物品ヲ貯フルニ極メテ完善ナル由ニ聞ケリ、

以上ノ説明ニテ校倉ノ名稱又ハ其構造ヲ知ルノ必要アラン、特ニ東寺ノ校倉ニハ
有名ナル百合文書ヲ藏スルヲヤ、博物館ノ奈良ヨリ移シテ公衆ノ見ルニ便セシモ
其所以明カナリトス

本文ニ連關セル正倉院ノ大略ヲ記スレバ左ノ如シ

○大和國奈良正倉ノ記

大和國奈良舊東大寺境内ニアル正倉院ニツキテハ學友數人ノ拜觀談及ビ予ガ實
見セシ品々等ニツキ又掲本、寫真等ヲ見テ得タル知識ハ歴史家ニトリテハ参考ト
ナルベキ件々多ケレバ記述シ置カントス、

今日正倉院ノ拜觀ハ嚴重ニシテ容易ニ拜觀ノ榮ヲ得ズ、然ルニ此院中ニ藏スルモノハ天平勝寶八歲五月二日聖武天皇崩御ノ後七々ノ御諱辰ニ當レル六月二十一日ニ天皇ノ御遺愛品及ビ、孝謙天皇、光明皇后ヨリ彼ノ廬舍那佛ニ冥福ヲ祈ル爲メ
献シ給ヒシ御物ナリ、此等ノ目錄ハ東大寺獻物帳トテ一冊アリ先年博物館ニテ刊行セリ、

畏友小杉氏ノ談ズル所ニヨレバ

まこと、この寶庫の構造は南より北へ三區にして總長十七間ばかり一かまへの
ひろさ凡五六間奥ゆき五間ばかり二階造りにていと高き瓦葺なり下の板間の
裏より敷地石礎あたりまで八九尺ばかりも有ぬべし外部よりこれを見れば床
の下の高き事俗に中二階などいふものゝ如くこれを以ても其志たゝかなるを
思ひはかるべき也

又云フ

この寶庫を東大寺古文書類に正倉とも正藏とも藏院とも或は甲倉とも甲雙倉
双甲倉などいへる皆このほくらの夏なり但し双倉とあるか如く昔は南北兩倉
のみにて中區は倉造りならて、たゞ空虚く便宜に備へしを文治建久頃より後の
文書には三倉とあるを思へば其頃よりや今の如くにはなりぬらん云々

右ノ文ニテ構造ノ大畧又古文書ニ見ユル名稱ノ大畧ヲ知ルベシ
明治十五年ノ始メニ於テ今日ノ如ク院内ニ諸品ヲ陳列ス其際略圖ヲ造リ一冊ト
ナセシモノアリ其一冊ノ略圖ノ一端ニ左ノ文アリ梗概ヲ知ルニ便ナレバ抄出ス
ルコト、セリ。

正倉院者、天平勝寶年間築造焉所收珍寶器材、蓋孝謙天皇及仁正皇后爲修。聖
武天皇冥福施入東大寺廬舍那佛者而爲。聖武天皇遺愛物也、以其國家重器密藏
謹收、以勅封之、不許猥開、而歷世奉焉。自孝謙天皇至安德天皇其間時有開封、史
冊一々不記之、今不可得而詳也。後鳥羽天皇建久四年八月有修庫之舉、開之則勅
使左少辨藤原定經、大監物安部泰忠監焉。後堀河天皇寛喜二年十二月開之、勅使
左少辨平時兼、大監物中原師世、是歲十月有盜入庫、故開而檢焉。四條天皇嘉禎三
年六月開之、勅使右中辨藤原季賴、大監物賀茂守榮點檢庫中寶器。延應元年十一月
開之、勅使左少辨藤原顯朝、大監物丹波尙長、允前攝政藤原道家拜覽之請也。仁治三
年三月開之、勅使右少辨平時繼、大監物丹波尙長、是月後嵯峨天皇即位、命進庫中
玉冠等也。後嵯峨天皇寛元四年九月開之、勅使左少辨藤原定賴、大監物丹波尙長、
以有事也。後深草天皇建長六年七月開之、勅使右少辨藤原資定、少監物平久進、以
雷震于庫修焉。正嘉二年正月開之、勅使右中辨平高輔允前攝政藤原兼經拜覽之請
也。龜山天皇文應二年五月開之、勅使同上、以後嵯峨上皇御幸南都也。後花園
天皇永享元年九月開之、勅使右少辨藤原明豊、以有事也。寛正六年九月開之、勅使不

詳允足利義政拜覽之請也、正親町天皇天正二年三月開之、勅使左中辨藤原輝資允織田信長拜覽之請也、後陽成天皇慶長七年六月開之、勅使左少辨藤原總光、右大辨藤原光豐德川家康將有修庫之舉、預點檢寶器也、同八年二月開之、勅使同上爲修庫也、後水尾天皇慶長十七年十月開之、勅使左少辨藤原業光、是歲十月有盜入庫、故開而檢焉、靈元天皇寛文六年三月開之、勅使權右少辨藤原資茂爲點檢寶器也、東山天皇元祿六年五月開之、勅使右少辨藤原輝光爲修庫也、仁孝天皇天保四年十月開之、勅使左少辨源俊明爲修庫也、聖上明治五年八月開之、勅使宮內少丞世古延世及文部大丞町田久成點檢寶器、同八年三月開之、勅使宮內大丞香川敬三、奈良縣有博覽會之舉、允人民之請、列庫中古器也、同九年三月開之、勅使宮內權大丞堤正誼、以奈良縣有博覽會也、同十年一月開之、勅使宮內少丞櫻井純造及內務大書記官町田久成、內務少書記官岡谷繁實點檢寶器、以正倉院管轄地四至爲一段八畝二十步、同十一年三月開之、勅使宮內權大書記官兒玉愛二郎、以堺縣有博覽會也、同十二年六月開之、勅使宮內權少書記官岡保義及內務大書記官町田久成、允大藏大書記官得能良助拜覽之請也、同年八月開之、勅使宮

内大書記官山岡鐵太郎導香港鎮臺軒納西觀庫中寶器、同年十一月開之、會右大臣岩倉具視、在奈貢奏而開之、勅使堺縣令稅所篤導獨逸國皇孫哈因立希觀寶器、同十三年二月開之、勅使宮內大書記官香川敬三謀設架庫中排列寶器、創工事、而工事內務權大書記官武井守正監焉、同十五年十一月訖工、勅使宮內權少書記官麻見義修、及農商務省御用掛准奏任黒川真頼、整頓寶器位置、茲叙其概略、使後來者有所考云、右ノ文ニ據ルモ如何ニ帝室ノ正倉院ヲ大切ニ取扱ハル、ヤ知ルベシ、又右寶物ノフハ詳細ニ記スレバ數紙ノ盡スベキニアラズ、又數多ノ圖ヲ要スルヲ以テ他日ヲ期スベシ

○我國史上ニ見エタル玉ニ關スル話

我國ニテ古來ヨリ玉ヲ尊ブノ風著シク恐レ多クモ三種ノ神器中ニ曲玉アルニテモ知ラルベシ、櫛明玉ノ命ト云ヘルガ能ク玉ヲ作リ天照皇大神ニ獻ゼリ此命ハ玉祖命トモ云フ同命ハ天孫瓊々杵尊ノ我葦原中國ニ降臨アルヤ玉工若干ヲ率キテ

日向ニ來リ常ニ寶玉ヲ作り献ぜシトノ傳說アリ、此等ノ玉ト云ヘルハ曲玉、管玉或
ハ竹玉ト云フ平玉ヲ作りシナリト云フ、
神武天皇ノ御宇、元年天皇ノ日向ヨリ大和ニ入り都ヲ大和國櫛原ノ地ニ定メ給ヒ
此歲ヲ以テ即位ノ式ヲ行ハル、ヤ櫛明玉命ノ孫ナル某ハ玉ヲ作テ献上シ御即位
ノ慶賀ヲ表セリ爾后同命ノ子孫ハ出雲ニ移住シ玉ヲ作ルヲ以テ職トナシタリ而
シテ毎歲調物ニ副ヘテ玉ヲ貢献シタリ其業世襲トナリ是ヲ出雲ノ玉作ト云フニ
至ル此子孫ヲ玉作連、玉祖宿禰トイフ降テ垂仁天皇ノ朝ニ至リ諸國ノ玉作ノ工人
ヲ督スルニ皇子五十瓊敷命ヲ以テセラル我朝廷ノ玉作ニ對スル監督ノ嚴ナルコ
ト此ノ如シ

抑、我邦ニ於テ玉ヲ作り玉ヲ用ユルノ目的ハ頭髮又ハ頸ニ掛クル埴輪土偶ニ於テ
見ルが如ク、手ニ纏ヒ足ニ飾リ、終ニ刀、劍、矛等ヲモ裝飾スルニアリシナリ、奈良朝ニ
至テハ佛器ノ裝飾品トシテ之ヲ用ユ、而シテ玉ノ價ハ左ノ古文書ニ據テ知ルヲ得
ベキナリ

依太政官天平十年七月十一日符買白玉壹佰壹拾

參枚直稻漆拾壹束壹把壹分

紺玉漆伯壹枚直稻肆拾壹束壹把捌分

標玉玖佰參拾參枚直稻肆拾漆束漆把捌分

綠玉肆拾貳枚直稻參束壹把漆分

赤勾玉漆枚直稻壹拾陸束捌把

丸玉壹枚直稻壹把貳分

竹玉貳枚直稻參把肆分

勾標玉壹枚直稻壹束捌把

右ハ奈良正倉院ニ傳フル天平十年ノ筑後國正稅目錄帳ト云ヘルニ載スル所ナリ
故柏木氏ハ此文書ニツキテ玉ノ考ヲ左ノ如ク述ベラレタレバ参考ノ爲メ抄出セ
ントス(此文ハ明治二十年東京人類學會雜誌ニ據ル同雜誌所載ノ分ハ今日絕版ト
ナリタレバ見ルコト易カラズトス)

爰ニ白玉トアルハ水晶ノ圓玉ナラン紺玉標玉綠玉ハ煉玉ニテ天造ノ寶石ニア
ラズ但シ其形狀ハ詳カナラザレドモ恐クハ圓キ小玉ナルベシ延喜式ニ所謂御

富岐玉又同書ニ五色玉トアルモノ則チ此類ナラバ延喜式ノ時祭式ニ曰タ
凡出雲國所進御富岐玉六十連毎年十月以前令意宇郡神戸玉作氏造備差
使進

赤勾玉トアルハ今云フ赤瑪瑙ノ曲玉ナラン丸玉トハ如何ナル玉ヲ云ヘルニヤ
未ダ知ルベカラズ竹玉ト云ヘルハ今云フ管玉ナリコレハ其形狀ノ似タルヨリ
名ケシモノナリ万葉集ニ「竹玉ヲマナクスキタレ」杯アリテ其名稱ノ舊キコト思
フベシ勾縹玉ハ煉玉ノ曲玉ナラン余モ往々縹色玻璃質ノ曲玉ヲ見シコトアリ
是等ノ雜玉ヲ當時筑後ニテモ製造セシモノカ(若林云此古文書ニハ紙背縫合ニ
筑後國ノ目津史真麻ト云ヘル姓名ヲ記ス故ニ柏木氏斯ク云ヘリ)猶考フベシ而
シテ以上八種ノ玉ノ價格ヲ比較スルニ

赤勾玉一壹顆　米壹斗二升(古量ノ一斗ハ今日ノ四升○四勺三撮四抄
有奇)

即チ一斗二升ハ今日ノ四升八合五勺餘ナリ(七顆ナレバ此七倍ナリ)

縹勾玉一壹顆　米九升(古量ハ前ニ全シ)

即チ九升ハ今日ノ三升六合三勺九撮餘アリ

白玉　壹顆　米三升一合五勺(古量前ニ全シ)

即チ三升一合五勺ハ今日ノ壹升貳合七勺三撮餘アリ

丸玉　壹顆　米六合(古量前ニ全シ)

即チ六合ハ今日ノ貳合四勺二撮餘

綠玉　壹顆　米三合七夕七撮餘(古量前ニ全シ)

即チ三合七夕ハ今日ノ壹合五勺餘

紺玉　壹顆　米二合九勺三撮餘(古量前ニ全シ)

即チ二合九勺ハ今日ノ壹合二勺六撮餘

縹玉　壹顆　米二合五勺六撮(古量前ニ全シ)

即チ二合五勺六撮ハ今日ノ壹合○三撮餘

右ハ大要ナリ此他正倉院文書中天平六年五月一日ノ造佛所作物帳ニ

琉璃雜色玉四千二百六十枚(丸玉十二百七十六枚)

小劍玉三千九百六十六枚

ト記セルガ如キ大ニ當時玉ヲ製作セシ状況ヲ知ルニ足ラン(玉ナラントノ説アリ)
近時關野工學士ハ東大寺法華堂本尊寶冠ヲ檢シ左ノ如ク「考古界」ト云ヘル雜誌ニ
記サレタリ

此聯珠帶ハ徑四五分ノ翡翠ノ丸玉四顆ト水晶ノ切子玉一個ト交互銀ノ細線
ニ貫ケル者ニシテ總テ丸玉六十、切子玉十六アリ(中略)各間ハ水晶琥珀吹玉ヲ
貫ケル紐ヲ以テ簡單ナル摸様ヲ作リ更ニ中輪帶ニ沿フテ無數ノ小珠玉ヲ貫
ケル繩狀帶ヲ纏繞セリ、此ノ繩狀帶ハ碧、綠、黃、綠黃ノ各色ノ吹玉ヲ貫ケル五條
ノ線ヲ綴リタル者ニシテ各條徑五厘ヨリ七八厘マテノ吹玉二寸許ノ長サト
徑一分以上ノ者二寸許リノ長サト交互連續セリ(中略)十二ノ花トナリ、毎花
ノ中心ヨリ多クノ珠玉ヲ貫ケル瓔珞下垂シ其端ニ勾玉、ヲ附セリ(中略)其珠玉
ハ水晶、琥珀、眞珠、瑪瑙、翡翠、吹玉ノ屬ニシテ其數ヲ概算スルニ大略貳萬六七千
ヲ下ラザルベシ云々

以テ奈良朝ノ頃玉類所用ノ概略ヲ了解スベシ而シテ此等古文書ハ正倉院古文書
中ニ於テモ他ニ類例少シ墾田等ノ文書トハ大ニ趣ヲ異ニセリ、

出雲ハ前ニ記スル如ク玉工ノ子孫代々住居セシ地ナルが近來曲玉ノ砾石ヲ三個
發見セリ、其中ノ一個ハ帝室博物館ヘ獻納シ公衆ノ縦覽ニ供セリ
抑曲玉ノ種類ニモ大小アリ一定セズト雖モ裝飾用タルハ明カナリ、右ニ示ス寫真
ノ埴輪土偶ハ京都帝室博物館ニ陳列ス曲玉ノ所用最モ明カニシテ頸ノ周圍ニ連
結一周セリ、此土偶ハ相模國鎌倉ヨリ發見セリ、曲玉ヲ造ル物質ニモ瑪瑙アリ、琥珀
アリ碧玉岩アリ、玻璃アリ、雜石アリ、形狀モ扁平アリ、丸キアリ、又頭部ニ特ニ彫刻ヲ
施セルアリトス管玉ニモ大小アリ、太キモアリ、細キモアリ、又太クシテ短キモアリ、
細クシテ長キモアリトス、

今日古墳ヨリ發見セラル、玉類ニハ國史上ニ見エザルモノモ少カラズ其種類モ
少カラズト雖モコヽニハ其詳細ノ事項ヲ略ス、

○大和國八瀧村文忌寸禰麻呂ノ銅牌圖解

此銅牌ガ歴史上ニ光輝ヲ添ヘタルコトハ第十五號ノ雜錄欄ニ記述シタリ、然ルニ

其略形ヲ示サレタシトノ希望ヲ抱カル、人モアリトノ故圖ヲ掲ダテ文ノ足ラ

金銅壺

ザルヲ補ハン



玻璃壺



玻璃壺ト認メアルハ金銅壺中ニ納メアリシモノ、
銅牌トアル其表面ニハ壬申年……廿一日卒ノ二
行ノ銘アリ銅函中ニ容レアリ、蓋ヲ以テ封ゼラレ
アリシナリ、東京帝室博物館ノ故町田久成ト云ヘ
ル人ハ前總長ナリシガ此銅牌等ヲ世人ニモ示シ
タシ、又八瀧村ノ遺跡ヲモ保存シタシトノ主旨ニ
基キ、同形ノ銅牌等ヲ摸造シ博物館ヨリ納ムトノ
コヲ記シ大和國八瀧村ノ舊地ヘ文禰磨ノ骨ヲ埋
メ、祭ヲナスト共ニ此摸造牌等ヲ埋メタレバ土地
ノ舊跡モ失ハズ、史學上歴史遺物ノ價值ヲモ失ハ
ズ一舉兩得ノ方法ヲ考へ實行シタリ、此事ハ世人
ノ知ルヲ稀ナレバ記載ス、

近來同國松山附近ニ於テ煉石様ノ方形
石棺ヲ發見シ、其中ニ同形ノ金銅壺ヲ得
タリ、壺ハ織物ノ片ニテ封セリ、方形石棺
ノ一隅ニ墨書セリ、年號ハ不明惜ムベシ、
姓名モ記シアリ、同時代ノ形式ヲ存スル
壺ナレバ他日ノ参考ニ記載ス



銅牌

士申年……十一月廿日卒
呂忌寸……十一月廿日卒

銅牌ヲ容レタル銅函

我邦ノ西南端九州ノ北邊ニシテ玄海灘
ニ突出セル小島アリ地圖上ヨリ見レバ
恰モ小半島ニ似タリ、志賀島ノ名稱ニヨツテ小孤島ナルヲ知ルベシ、余ハ九州ニ遊
ビ歴史上ノ遺跡ヲ實踐セシコト再三ナリシガ、此志賀島ノ實況ヲ見ルニ、恰モ相摸
國江島入口ト同一ニシテ滿潮ノ際ハ筑前ノ海岸ヨリ歩行シ渡ルベカラズ、退潮ノ

際ハ何人モ砂上ヲ歩シテ島内ニ行クヲ得ベシ博多、福岡ヨリハ半日間ニシテ至ル
 ヲ得ベキ船便アリ、彼ノ蒙古襲來ノ際上陸セシ地名中ニモ此島名アリ、今日ハ蒙古
 人ヲ埋メシ石碑ノ小ナルモノ存スルヲ見ルノミ、此島中ヨリ天明四年二月二十三
 日歴史遺物中白眉ト稱スベキ一個ノ金印ヲ發見シタリ。(史講義錄中ニ寛政年中代
 ノ誤ナリトス)爾來此金印ニツキテハ鉢ノ點ニ於テ彫刻ノ點ニ於テ又文字ニ就テ
 講究ヲ爲シ全ク漢ノ金印ナルコトヲ知ルヲ得タリ、史學家ノ功亦大ナリト云フベ
 シ、歴史遺物研究ノ順序ヲ示ス方法トシテ又支那日本ノ歴史上當時交通ノ狀況ヲ
 知ラシムル點ニ於テ其梗概ヲ記述スベシ。

抑此金印ハ天明四年二月二十三日筑前國那珂郡志賀島ノ田中ニ從來大石アリ他
 ヘ移シ易カラザリシヲ偶々掘リ起シタルニ其大石ノ下ニ小石アリ柱トナシ内部
 ハ空洞ナリシヲ探リ見タルニ一物アリ水ヲ以テ洗ヒ見タルニ純金ノ印ニシテ篆
 文ヲ刻シタルナリ、土地ノ人民ヨリ當時ノ國守筑前國福岡ナル黒田家ニ献ゼシカ
 バ黒田家ニ於テ其臣龜井魯ヲ召シテ讀マシメタルナリ、其文字ハ

漢委奴國王(圖ヲ參照スペシ)



東京帝室
博物館備
品ノ摸印
ヲ捺ス

トアリ鉢ノ高サ四分、印面ハ七分八厘、厚サ三分ナリ
 今日此金印ハ黒田家ニアリ、而メ先年帝室博物館ニ
 於テ此形狀、彫刻ヲ現物ノ如ク摸シ、黒田家ヨリ現物
 ヲ借用シタリ。テ歴史部陳列室ニ備ヘタリ、余ハ現物
 ノ印影ト上ニ掲グル印影トヲ比較スルニ毫モ差ナ
 キヲ以テ多數ノ圖書中ニ引用セル此印影ト同日ニ
 見ルベカラザルナリ。

右黒田家ノ臣龜井魯ガ金印ノ文字ヲ讀ムヤ南紀ノ
 人、田敬之ナルモノ天明五年即チ翌年ニ於テ後漢金
 字ヲ誤讀シ僞作ノ辨ナル一篇ヲ世ニ示セリ、是レ亦史學家が世人ノ學術上ニ妨害
 ヲ與フル一例ヲ知ル方法トシテ心得置クベキ一項ナレバ記述シ置ク、而メ從來此
 金印ニツキテハ其發見ノ場所ニアリシ大石ハ考古學上古墳ノ天井石ナルコトヲ
 知ラズ、小石ノ柱ト云フハ古墳ノ入口ナル兩側ノ石ナルコトヲ辨ジタルモノナシ、

此等ノ一ハ史學會發行明治二十八年六月刊行ノ史學雜誌第六編第六號ノ余ガ文ニツキ又明治二十五年十二月刊行ノ同雜誌ニツキテ三宅博士ノ文ヲ一讀アルベシ、此他金印ノ事ニツキ記述セルハ寛政年中刊行ノ好古日錄(藤原貞幹著)ナリ、左ニ南紀田敬之ノ後漢金印論ヲ示スベシ(此人ハ鐵筆家ト見ニ)

皇邦天明四年甲辰春二月戊申廿三日、筑前ノ州那珂郡志賀島村ノ農夫田ヲ鑿シ、黃金ノ印一枚ヲ得タリ、方七分八厘、厚サ三分、鉢ノ高サ四分、重サ二十九錢アリ、文ニ曰ク、漢委奴國王、而ノ鉢形辨ズベカラズ、筑前ノ文學村山子業、圖章ヲ携エ、友人邊廷輝ニ示ス、廷輝摹寫シテ余ニ示ス、余之ヲ見ル、五字ノ章、印篆ヲ用ヰ摹ス、古雅已ニ甚シ、乃チ廷輝ヲ紹介シ、子業ヲ過り、其印スル所ノ真圖章ヲ視ゾコヲ請フ、章法字法、燦然トシテ備俱セリ、古樸愛スベシ後人ノ手造及ブ所ニアラザルモノ、眞ニ漢物タルヤ疑ヒナシ矣、余門生及ビ同好ノ爲メニ之ヲ辨ゼントス、因テ謹ンダ摹刻ス(印影アリ)然レハ未ダ毫釐ノ差ナキ能ハズ實ニ米元章所謂畫シテ摹スペク書シテ臨スペクシテ、惟印僞作スベカラズ、作者必異ナリト信ナルカナ、按スルニ漢ノ蠻夷王ノ印、金印紫綬ナリ、前輩云フ惟、鉢諸官印ト

異ナリ、蠻夷ノ印ニ於テ鉢ハ則チ駝龜兔之屬、其地駝龜兔之屬多シ、故ニ鉢ノ爲メニ周禮六節ノ義ヲ示スナリト、余趙凡夫ノ印譜、顧氏印藪、秦漢印統、載スル所ノ蠻夷王君侯長ノ印、龜駝兔環鼻鉢ノモノアリ、漢ノ諸印亦龜駝兔環鼻鉢ノモノアリ、先輩ノ論、鉢制固ヨリ一決シ難キナリ、今得ル所ノ黃金ノ印、鉢ノ高サ四分其形蛇ニ類シテ審カナラズト云フ(若林云此入ヘ現物ヲ見ザル故)余其印スル所ヲ視ルニ、印面猶未ダ磨滅セズ、其鉢形高サ四分、而ノ未ダ辨ジ難キニ至ラズ竊ニ惟ルニ筑前ノ士、博物好古、然レドモ亦強テ之が説ヲ爲サマルモノ乎、筑前東都ヲ距ル三千餘里、其鉢制是レ得テ審カニシ難キニ非ズ、他日子業ノ問ニ因テ之ヲ辨ゼン、又按ズルニ漢ノ官儀、諸王黃金璽、橐駝鉢、王之ヲ厚フス、漢晉印章圖譜ニ鉢制一ニ曰ク黃金橐駝鉢、一ニ曰ク銅印駝鉢、余結髮ヨリ印章ヲ好ム、今世聞ク所古今ノ印譜四十餘部而ノ親シク其三十三部ヲ見ル、其正ナル者趙凡夫印譜、顧氏印藪、秦漢印統ニ及ブモノナキ也、其載スル所漢ノ蠻夷長ノ印、唯銅印九枚、鉢ナキモノ四、駝鉢ノモノ三、兎鉢ノモノ一、及魏晉蠻夷王君侯長ノ印三十二枚、駝鉢ノモノ十ノ九、魏晉モノ亦是ノ如シ、此ニ繇テ之ヲ觀レバ今得ル所黃

金ノ印ハ鈕形橐駝乎。(若林云コレハ現物ヲ見ズ數ノ多キチ以テ断言セシ故也)然リ而ノ前漢書、西城傳ニ云フ、夷ニシテ漢ノ印綬ヲ佩スルモノ凡ソ三百七十六人、今凡夫ノ印譜、印戴、印統、載スル所唯銅印九枚ノミ金印ナルモノナシ且ツ兩漢諸官金銀ノ印多シ咸大サ寸ヲ踰エズ、其字皆白文鈕ヲ以テ尊卑ヲ別ツ、而ノ諸印譜載スル所數千百顆率ネ銀塗、金塗、銀銅寶石玉瑪瑙水精印ノミ金印載セズ、夫レ金ハ能久ニ耐ユルモノ然リ而ノ一モ存スル能ハズ、意フニ其質貴シ故ニ鑄銷セラル、ヤ必セリ且ツ金銀銅印ハ鑄アリ刻アリ鑿アリ而ノ今得ル所黃金ノ印何ノ制ナルヲ知ラズ其圖章篆軸字勢ノ曲直ニヨツテ審カニ之ヲ考フルニ是則チ鑿スルモノ而ノ鑿モ亦法アリ、官重キモノ兩鑿文ヲ成ス、官卑キモノ一鑿字ヲ爲ス、今得ル所黃金ノ印ハ兩鑿セルモノナリ、然レニ余未ダ眞ヲ見ズ深ク以テ憾トナス(以下略ス)

以上ノ文ニヨツテ考フルニ兩鑿文即チ白文ヲナスト云フガ鐵筆家ノ注目セル所ナリ、而ノ鉢ハ蛇ナルコト今日何人モ認メタル所學古編ニモ

漢晉諸印、大不踰寸、惟異其鉢、以別主守之上下、諸侯印橐駝鈕、列侯龜、將軍虎、蠻、夷

蛇、駝兔之屬、其字皆白文。

トアリ、又印戴ニモ

歷代印文皆不稱代、唯所賜蠻夷印咸稱代

トアルヲ以テ見レバ委奴國王ノ上ニ漢ノ字ヲ加ヘタルモ右ノ式ニ合セリ、以上ノ諸點ニツキ歷史上必要ナル金印タルニ於テ其文字ノ意義ヲ解スレバ即チ倭奴國ト云ヘルハ倭ノ奴國ニテ倭ハ我ガ全洲ノ總稱、奴國ハ其中ノ一國即チ筑前儼縣ノ地ナリ(松浦道輔ノ僞作ノ辨ハ考古學會雜誌第二篇第五號ニアリト考ヲ起サル、人モアセリ)

○歴史遺物ノ誤解ト發見ノ苦心

何事ニモ誤解ト云ヘルコトハ免ルベカラザルコトナガラ歷史上ノ事項ヲ確證スルニ引用セラレシ歴史遺物ノ誤解ハ害ヲ公衆ニ及ボシ又井蛙ノ見ヲ世ニ示スニ至ルベシ其實際ノ例ヲ舉ケテ世ニ示サバ或ハ意外ナリトノ考ヲ起サル、人モアセリ)

ペシ或人或ル一書ニ左ノ如キ文ヲ記シタリ、

出羽ノ國府趾

往古出羽ノ國府小勝郡ニアリシハ續紀以下三代實錄等ニ小勝ノ棚戸又ハ城司ヲ置レタルニテ思ヘバ同郡ナルコト押テ知ルベキヲ和名抄ニハ出羽ノ國府平鹿郡ニ在リト見エタリ、其ハ小勝郡ヲ裂キ平鹿ノ郡ヲ置レタルヨリナルベシ、同郡木下村支郷御庫前村ハ古ク寶藏ノアリシ地ナルヨリ其名傳ヘテ村名トナレルヨシ、古老ノ申傳ニ残リタレトモ其何ノ寶藏ニアリケンヤ、未だ明カニ云フモノナキニ至レリ、又其東端ヲ灌流スル川之ヲ小勝田ノ名負テアレドモ、又何ニヨリテ斯ル稱アルヤ、知ルモノナキカ如シ、扱此川ヲ然稱スル所以ハ小勝城ノ公租納ムベキ耕田ヲ有スル部落ハ爭フテ灌注セシカバ耕民等當時之ヲ稱シ以テ千歳ノ後マデモ川ノ名ニ流レ來ニケン、他郡ニモ小勝田ト稱スル地字、所々ニ残リテ、中ニハ村名トモナルモノサヘ聞ユルハ皆同シ例ニテ彼元慶ノ役ノ頃ヒ俘囚ノ群ニアラズ、小勝城ノ民タリト聲表シ、散在シアル住民稱謂シテ其名殘レリト思ヘル、モノ、史上且ツイアリトス、木下村ハ城柵ヲ置レタル址ナレバ名ニ負

ヘルモノナルニ、柵ノ字ヲ用ヰスナレルハ略書マテナルベシ、隣村木戸村嘉吉年中マデ、正シク柵戸村ニ書レタル古文書殘リテ、イトイ明ラカナル例證アリトス、サテハ柵下村ト書レタル論ナキナカラ前ノ如ク署字シ年所ヲ經タレバ少シク飽ヌ處アルガ如クナレド、押テ考ヘ渡セバ誰カ惑フ處アルベキ、斯ク古史ニフサハシキ、地名ノ殘リタルノミナラズ、此兩村ヨリ土器石器ノ類、年久シク發見シアリタルニ、去シ明治十九年牛ガ首(御庫前村ノ内ナリニ)ニ孟瓶ノ屬夥多發掘セシモノアリシガ、昨年ニ於テ石鎧、孟甕、或ハ石劍ナド數百點發掘セシハ古史ノ所謂府趾ニシテ俘夷ヨリ收集セシヲ藏シタルモノナルベシ、仍テ國府ノ舊趾ヲ證スルモノ得タリト人々傳唱シ措カザルヲ聞、一日實地ニ就キ探檢スルニ殘片今猶土上ニ散見シ、童子ノ弄器ニ持去ルヲ見ル而シテ之ヲ顧ルモノダニアラザルハ、甚可惜思フ餘リ此稿ヲ艸ス、

右ノ考中國府ノ趾ニツキ文書等ヨリ引用サレシ事項ハ有益ナルベシト雖モ惜ムベキハ孟瓶ノ屬果シテ俘夷ヨリ收集セシモノナルカ、若シ然ラズンベ證明ノ一部ヲ削リ去ラザルヲ得ズ、因テ同地ノ學友某ニ孟瓶ノ圖石鎧ノ圖ヲ書カシメ送附ア

ランコヲ依頼シタリ、然ルニ左ノ回答ヲ得タリ、位置、牛頸ハ淺舞町ノ西半許里雄勝田川ノ左岸ニ在リ、平澤村ヨリハ西ニ四五町ヲ隔ツ、御倉前村ヨリ田二三枚ヲ距ルノミ、

面積、開墾地ハ東西二十間南北四十間許、發掘セシ深サハ僅ニ二尺バカリナリ

堀出量、土器ハ俵ニテ三四俵モアラン石器ハ少シ、曲玉モ發掘セリト雖モ未ダ見ズ

土器摸様、雲形ト兩脚ノ如キモノト、算木形ノ如キ物トノミナリ、器底ニ赤色ノモノ附キタルアリ

此答ニ添フニ石器ノ圖トシテ石棒、石斧、石庖丁類又土器圖トシテ壺、急須形、土器、皿等ヲ以テセリ、(此等ノ圖ハ省畧ス)

先ヅ圓面ヲ見、又發見シタル土器類ノ多量ナルヲ見ルニ、人類學上ヨリ見レバ日本ノ歴史前ノ住民ガ遺セシ石器時代ノ用品ナリ、俘夷ヨリ收集セシ器物ノ類ニアラズ、石器時代ノ人民ガ日用品ニ供セシ土器類ニシテ青森、秋田、岩手ノ各村落ヨリ又

ハ九州、中國、關東地方ノ各地ヨリ發見セラル、品々ト同一ニシテ獨リ蝦夷ノ住ミシト云ヘル地方ニノミ存スル器物ニアラザルナリ、

故ニ前文證據ハ俘夷ヨリ收集セシ品ヲ藏セシ寶藏ノ趾ヲ明カニセシヨリハ寧ロ石器時代ノ遺跡ノ存在ヲ明カニセリ

止ヲ得ザルコトハ云ヘ某氏ノ意見ハ其土地ノミニツキテ考證セントシ此弊ニ陥リシモノナリ、他ノ史學ニ關係セル事項ヲモ一應了解シカバスル誤解ヲナサマリシナラン、余ハ某氏ノ爲メニ深ク惜ムト共ニ石器時代ノ遺跡ヲ研究セントスルモノニ諸種ノ材料ヲ與ヘラレシヲ賞揚シテ止マザルナリ、

斯ク說カバ歴史遺物ノ正シキ説明又ハ發見ハ専門家ノミニ托セザルベカラズト考ヘラル、然レトモ古來ノ歴史遺物ハ多ク偶然ノ發見ト史學専門家ノ手ニヨラズシテ世ニ顯ハル、今其一例ヲ舉ケテ其發見ノ苦心ヲ想ハシメントス左ノ一節コレナリ、

和學家山田以文ノ書中ニ「石川卿金牌出現之由來」ト題セル一節アリ寫本ニシテ世ニ傳フルコト少シ左ニ抄出セン

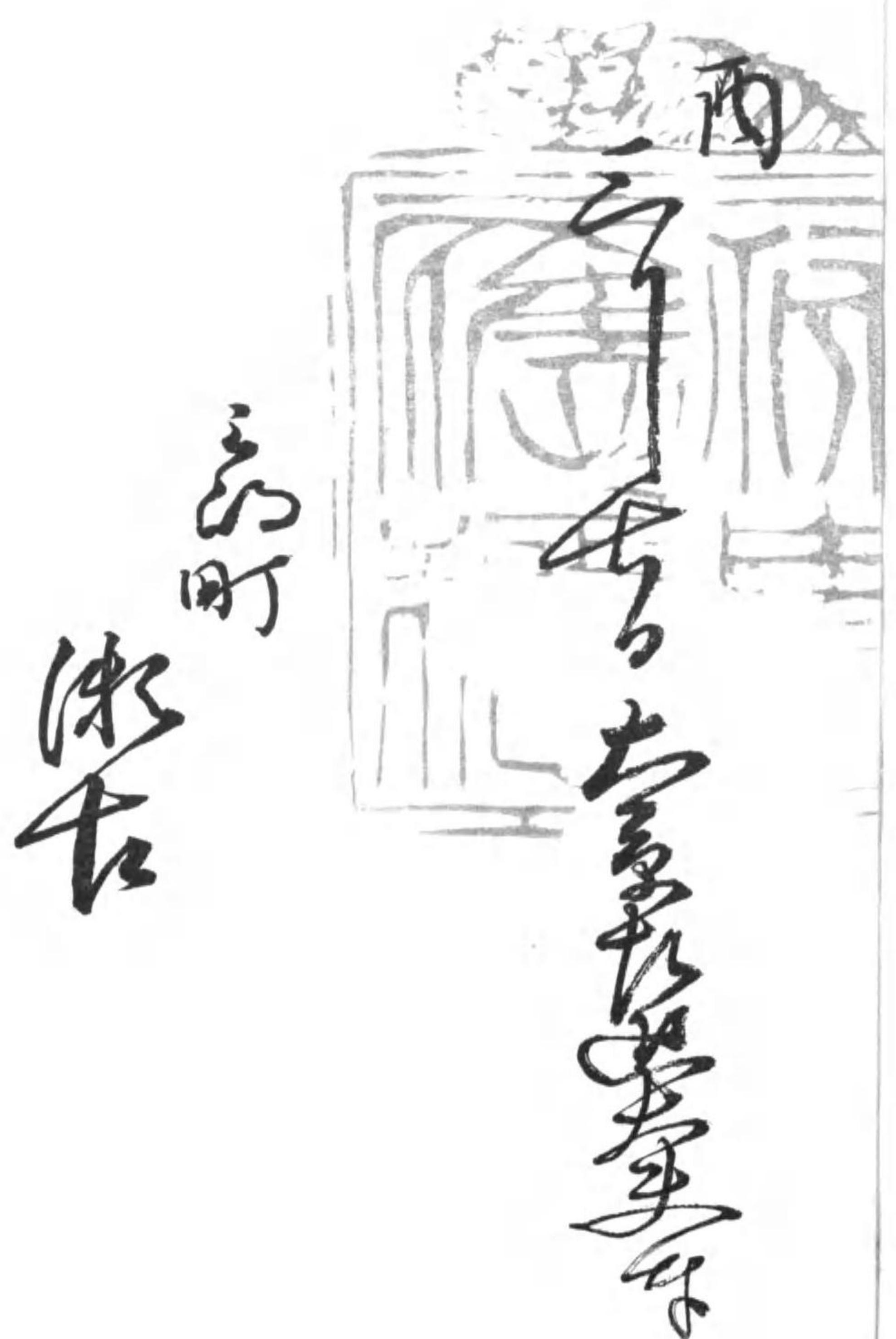
攝州島上郡眞上高德ト云フ村ハ高櫻領ニテ京ヲ距ル「六里、高櫻ヨリ東北十四五
町モアルヨシナリ、此村ノ住人、庄屋六右衛門ト云フ人ノ住宅ノ後ノ山ヲ荒神山又
荒神松トモ稱ス此山ノ内大ナル松木アリ、其周圍三四間ノ程ヲ昔ヨリ靈地ト稱ス
近年右庄屋困窮シテ活計ノ爲追々山ヲ開發シテ林檎ノ木ヲ植シヨシナリ、去ナガ
ラ右ノ松ノ邊ハ靈地ナル故恐テ開カザリクリ、去年(文政二年ナリ)十二月二十八日
近隣ノ百姓來リ云フハ荒神山松麓土陷リヌ、此事知リ給フヤト云フ故アヤシキ
コトニ思ヒ六右衛門悴行テ見ルニ案ノ如ク陷ルコト二尺餘ナリ、右悴云ヤウ、アラ
アヤシキ夏カナ、昨夜ノ夢ニ山落チ入リテ大ニ騒ギ、辛フジテ家ヲ逃去リヌト夢見
タリ、凶夢ト思ヒ人ニモ告ゲザルニ夢ニタガハズ、是ハ全ク近年山ヲ開テ木ヲ植シ
咎ナルベシトテ甚不快ニアル處最早歲モ暮レ今正月二日右悴ト百姓一人兩人朝
ヨリ垢離ナドシテ身ヲ清メ右ノ處ヘ行テ陷リシ、地ヲ掘ルニ三尺程ノ間赤土ナリ、
夫ヨリ下ハ悉ク炭ヲ粉ニシタル如ク黒土ナリ、三尺許ノ間ニ金牌ヲ鋤ノ先ニ掘ア
テタリ、元ヨリ金牌ニ箱ナシ夫ヨリ又掘ルニ一圓炭ナリ、小キ箱アリ此筥檜ノマサ
ニテ内外朱塗リナリ、寸法ハ長サ六寸幅五寸深五寸脚ナシ(中略)元ノ如ク納ムルニ

シクハナシトテ深ク慎テ他人ヘハ秘セリ、三十年前ニ狐村中ニテ死セシコトアリ、
(中略)狐靈老女ニツキテ口バシリ此地ハ添モ武内公ノ在ス所ナリ、云々斯様ノコト
モアル故右六右衛門先代迄節日ナドニハ燈明ヲ供シテ家内ノ安全ヲ祈リシヨシ
ナリ、近年ハサルコトモナカリキ、サテ當三月六右衛門亡父ノ年忌ニ京大通寺王社
リナ寺中多門院南谷ノ住右多門院當住六右衛門子ナル故招請シ其時右荒神山金牌
一件ヲ語ルニ多門院云フ右金牌文字等ヲ寫シ候哉ト問フニタゞく恐テ即時元
ノ所ニ納置キシ故一文不通ノ百姓イカデアノムヅカシキ文字ヲ讀ンヤト云、夫ヲ
其マニ納ルハ却テ神徳現ハレズ、再ヒ發テ右文字ヲ讀マバ、ソレニテ其神徳モ知
ル、ナリ僧ノ身分廻向シテ發カバ何ノ祟ヤアラント勸メラレ再ヒ金牌ヲ取出シ
多門院持チ歸リテヨメトモ本朝ノコトニハ書籍モ乏シキ由ニテ醫師山脇道作方
ヘ借リ北小路大學助之ヲ打チ又六條本願寺ニテ灑禪正ト云フ學者ナド打チシナ
リ以文ハ北小路打本ヲ持チ來リ考證ヲ請レシ故直ニ續紀以下ノ書ニテ考證ヲ作
テ右多門院ヘ行テ與ヘシカバ大ニ悅テ以文ニモ打本ヲ許ルセリ、右ノ如キ高貴ノ
金牌故容易ニ見セズ又勿論打本ヲ妄リニ人ニ與ヘズ志アル人ニハ姓名ヲ錄

シテ之ヲ與フル故決シテ書林ナドニハ見セズ、固ク龜末ニナラザルヤウニ取扱フナリ、以文モ此夏ヲ戒メ白ス右荒神山ハ即チ酒垂山ナリ、右金牌多門院ニ於テ一夏中讀經廻向畢リ高櫛、城主飛彈守殿預リ置カル、ヨシナリ、骨ハ元ノ宮ニ納メテ壺ニ入レ元々如ク葬レリ。

六右衛門家系致一覽候處佐々木系圖ト混雜シテ建武頃ニ石川何某ト云人二代アリ此頃此邊ヲ領シテ後世ノ小大名ノ様ナルモノ歟何分元ハ此一族住シテアリシ趣ニ見ユレドモ古文書等モ見エズ八幡宮ノ神領故ニ八幡ノ邊ヘ散亂セシヤウニ記セリ、當時ハ田中稱號ニテ源姓ノヨシナリ、右系圖ハ例ノ後世系圖ノ寫シナリ、右近年ノ一奇夏ナリ、千歳ヲ經テ木ノ箱入朽ヌ事怪ムベシ、金牌ニ箱ナキ事コレ亦奇ナリ、

若林曰ク文忌寸禰磨ノ牌ハ函中ニアリシナリ此事前項ニ記セリ、参考スベシ十世ノ孫ノ考公卿補任ニ據リ推テ考候乍去御賢慮ニテ早々御示教希入候、尤滿智宿禰蓋シ石河宿禰子ト云フコト書記集解ノ説ニ據リ申候右集解何ノ文ニヨラレ候ヤ出所若御考候テ可被仰下尤十世孫ト云フ其人ノ年紀未ダ分ラズ故委シキ事



新羅人不以人

河山之北國多數

阿人多氣勢若

蓋一而三可謂之

如斯稱之鬼子

上來一而三可謂之



新羅人不以人

宛テ難ク候只補任ニヨリ名ヲ並ベ候迄ニ候賢慮奉伺候間無御遠慮御示教被下候
ハヤ辱奉存候夏何分心濟不仕候間考證愚考等ニ漏レ候事又貴意ニ叶ハザル義ハ
偏ニ御點削奉仰候（下略）

以上記セル文ハ山田以文ノ某氏ニ贈レル手紙ナリ、右文中ノ金牌ト云ヘルハ銅牌
ニシテ牌ノ表面ニ記セル文ハ世ニ流布セル古京遺文ニモアリ又金石年表中ニモ
掲ゲラレタリ、全文ヲ知ラント欲スル人ハ一讀スペシ而ノ後右ノ文ヲ對照セバ更
ニ「發見ノ苦心」ト發見ノ効トヲ知ルヲ得ベキナリ、

○予が見タル古文書中ノ一、二、

余輩ハ少シク古文書ニツキテ見タル所ノ一二ヲ披露シ古文書學之一端ヲ補ヒ正
科講義ノ一助トナサバ或ハ學術上裨益ナキニアラザルベシ、コヽニ其白豕ノ笑ヲ
顧ミズ、遼東ト海ヲ隔ツル九州ノ古文書又ハ明ヨリ豊公ニ贈リシ古文書等ヲ記ス
ベシ

先づ予ノ見タル明國ヨリ我ガ豊公ニ贈レル封冊文ハ先年豊國祭ノ際京都帝室博物館ヘ石川子爵ヨリ出品ニナリシモノナリ、豊公怒テ裂キ棄テシトハ怒ヲ形容セシニテ、容易ニ裂キ得ルモノニアラズ、抛ケ出セシヲ斯ク形容シテ書キタルナリ、摸本ハ今日東京帝室博物館ニ陳列セラル、子爵石川成徳氏ヘハ堀尾家ヨリ傳來スト云フ其文ニ曰ク

奉	大篆榮施	里之關懇	念臣職之
大承運	鎮國之山	求內附情	當修恪循
皇帝制曰聖仁	嗣以海波	既堅於恭	要束感皇
廣運凡天	之揚偶致	順恩可斬	恩之已渥
覆地載莫	風占之隔	於柔懷茲	無替款誠
不尊親帝	當茲盛際	特封爾爲	祇服綸言
命溥將暨	宜續彝章	日本國王	永遵聲敎
海隅日出	杏爾豐臣	錫之誥命	於戲寵賞
罔不率俾	平秀吉	印影	

昔我
皇祖誕育多方
龜紐龍章
遠錫扶桑
之域貞珉
同北叩萬
秀吉ノ拋^{(イ)テ}無禮ノ言ヲ怒^{(ロ)リシ}ハ目前ニ見ルが如シ今ヤ此明國ハ亡ビ清國亦戰亂ノ中ニ沒ス故ニ此封冊文ハ古文書トシテ價值アリ歴史上ノ遺物トシテ一見スベキモノナリ、所藏主石川子爵ハ下谷中根岸ニ住セラル、ト云フ

次ニ横文ノ印章アル細川家ノ古文書ニシテ予ニ嘗テ佐々豊水氏ヨリ印章ニツキ鑑定ヲ依頼シ來レルモノナリ、其文ニ曰ク
知行所ヘ往來送迎夫仕様之覺
一高五拾石^カ百石迄者
一高百五拾石^カ貳百五拾石迄者
一高參百石^カ四百石迄者
夫壹人之事
夫貳人之事
夫三人之事

一高四百五拾石カ六百石迄者
夫四人之事
一高七百石カ千石迄者
夫五人之事
一高千五百石カ貳千石迄者
夫七人之事
一高壹万石者
夫貳十人之事
外ニ河内馬乘共ハ右之分ニ應而可召遣也
一夫遣者右之分たるべし小荷駄遣候者壹疋夫三人之代たるべき事
一人馬飯米飼料惣國並たるべき裏
一人米惣國並たるべき裏
一馬のぬかせら惣國あみたるべき事
以上

寛永十年八月吉日

松田圓齋 同次郎八殿 魚住平左衛門殿
友田源左衛門殿 薩田十左衛門殿 志水次兵衛殿

いづみ

神足少五郎殿

永井宗琢

此古文書中ニ印トアルハ丸ノ中ニ Tadaoqui トアリコレ忠興ナリ細川氏ノ羅馬字
ヲ用ヰタル恰モ黒田如水ノ印ニ羅馬字ヲ用ヰタルト同ジ人夫送迎ノ一古文書近
頃驛傳ノ歴史参考用トシテ遞信省へ出品セリ史料タルモノ應用モ亦弘シト云フ
ベシ(此印朱印ナルハ普通ナルモ、右文書ノ印ハ綠色ニテ異例ナリ)
近來學友樋畠氏新ニ伊豆國ヨリ古文書一通ヲ得タリ、卷ノ表題ニ「虎ノ印」ト記セル
ノミ、何年頃ノ文書ナルカ、何人ノ印章ナルカ不明ナリトノ間ニ對シ現品ヲ一覽セ
シニ左ノ如シ

(コニ挿入ノ文書影寫ヲ貼附アルベシ)

右印ノ上部ニ虎ノ形アルハ、俗ニ虎ノ印ト稱シ北條氏康ノ用ヰシモノナリ而ノ
祿壽應穩

ノ四字ヲ刻セリ、永祿十二年六月氏康、武田晴信ヲ三島ニ襲ヒテ走ラセシコトアリ、
氏康ト三島トノ關係ハ此等ノ一事ニ止ラズ、小田原城主トシテ毎ニ權威ノ此地方

ニ盛ナリシヤ推知スペシ

以上記シタル古文書ハ歴史上趣味ヲ加フベキモノニシテ一ハ海外ヨリ來リシ文
書一ハ領内ニ示セシ布達、一ハ證人預ケ證ト見ユ、各文牘各印影ハ史學ニ志スモノ
、参考トスベシ、因テコヽニ其大要ヲ記スルコトヽセリ、

涉史餘錄終

ば
雜

62
390

終

